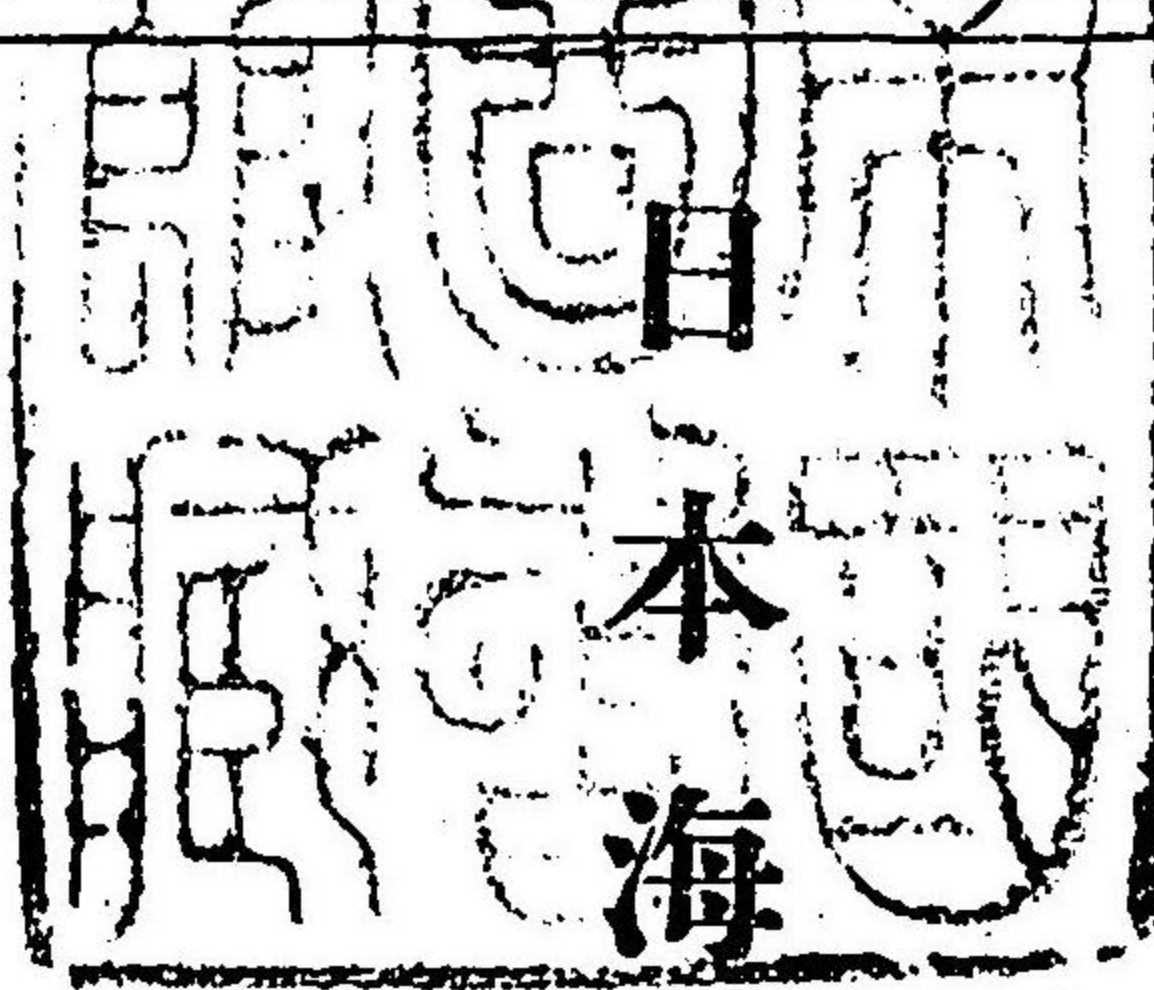


1168-11

96-45  
275



菊池幽芳著

周遊記

春陽堂發行



卷首に録す

日本海周遊記は余が昨夏、日本海の沿岸を周遊し來れる紀念として成れるものなり。

余の航路たる、始め敦賀を發し、北陸奥羽の沿海を経て函館に赴むき、別に室蘭に航し、室蘭より北海道内地に入り、札幌を経て小樽に出て、小樽より西比利亞に航し、西比利亞より元山釜山を過りて門司に來り、更に山陰の沿岸を経て再び敦賀に歸航せるものにして、乃ちこゝに日本海を一周し來れるなり。

然れどもこの書の録せる所敦賀より烏拉地俄斯德を

(二)

發するまでに止まる、朝鮮の觀風、山陰沿岸の風光は別にまた稿を次ぎて世に出さんとす。

余の周遊中に最も多くの趣味を感ぜるものは、北海道、西比利亞及び朝鮮なり、從つてわが最も研究に力を注げるもの、北海道と西比利亞及び朝鮮)とにして、殊に西比利亞の自然、及び西比利亞における露人の形作れる社會は、余の平生多少の注意を費やしたる所なるを以て、親しくその地に臨むに當りては、限られたる短時日を最も巧に利用するの策を取り、比較的多くの研究をなし得たるは、余の私かに満足する所なり。

(三)

此故にまた周遊記中、余が多大の興味に驅られて筆を執れるものは、第二編西比利亞にして、第一編中なる北海道の自然も、また余に多くの趣味を感ぜしめたるものなり、さればわが周遊記の眞面目は主として第二編にある事を、敢て讀者に告白せんとす。

この周遊記は、昨夏九月中旬より十二月に亘り、三ヶ月間の『大阪毎日』紙上に連載して、十餘萬の讀者より異數の好遇を與へられたるものなり、余が始めより歓迎さるべきを期せずして、意外の歓迎を受たるもの、かの拙劣評家の嗤笑を被れる『己が罪』とこの周遊記とあるの

みたく再び世に出すに當つて、更に前の如き光榮を擔ひ得るや否やは、余の知る所にあらず。最後に附記す、余が周遊の途に就くに際して、紙上に掲げたる『日本海周遊の途に上るの記』一篇と、別に歸來直ちに草したる『船中生活の趣味』一篇とあり、今周遊記を梓に上すに臨み、鶏肋もまた捨難く、次々卷首に掲ぐる事とせり、但それは必らずしも讀者の閲讀を強んとする所にあらざるなり、幸に諒せよ。

明治三十六年首夏

幽 芳 識

日本海周遊の途に上るの記

頃日二三の新聞紙は傳へて云ふ、舊大和郡山の藩主柳澤伯避暑のため家族及家庭教師を率ひ、横濱出帆の汽船に搭じ、日本の沿海を一週し、此間凡て船中生活を取り、令息令嬢等に對しては、その過る處に従ひ見る處に依り、家庭教師をして地理歴史の教授をなさしめ、數十日を以て横濱に復航する筈なりと、もし歐米の地において歐米人が斯る旅行をなすとの事を聞かば、何人も珍らしとして之に耳を貸すもの無るべし、況んや之を家庭の美談として故らに吹聴するが如きをや。

然れども家庭思想の發達せざる、また避暑旅行の眞味の解せられざるわが邦にありて伯爵の此行の如き、實に目新らしき壯遊に値し、

之を上流社會における模範的避暑旅行といふも不可ならず、更に家庭の方面より見る時は實に一場の美談と稱するに躊躇せざるなり。日本は環海の國なり、海事思想養はざるべからずとは萬口の唱ふる處にして、而も人の甚だ海事に冷淡なるは何ぞや、畢竟家庭における海事思想の發達せざるにあるのみ、海に出れば船に酔ふて苦しむものと思ひ、衝突難破の危険あるものと思ひ、單調無味にして娛樂なきものと思ふは獨り一家の妻女のみならず、主人公も亦徃々斯の如く信じ、海上の生活が非常に清潔にして趣味と變化とに富むを知らず、海洋における旅客船の設備殆んど遺憾なきと、如才なき船員の接待とは常に旅客の意を快適ならしむる事を知らず、皮膚と呼吸器と消化器と最も清新にして鹽分を含める海氣の刺激を受けてその作用を一新し、非常に身體を壯健にし精神を快活ならしめ、はた食

卓の樂しみを忘るゝ能はざらしめ、肉體精神共に一大慰安を受けしむる事を知らず、はたまた自から沿岸の地理風俗歴史等に通ずるを得て、快樂の中に不知不識各種の智識を養ひ見聞を廣くし得るの大利益ある事を知らざるなり、殊に日本沿海の如き到る處名地舊跡に富み、風光の愛すべき多く他に比なく、若し夫舷頭の月萬頃の波、月は大瀛の水を照し、波は燦として玉兔を碎くの時、何人と雖も多少の詩趣を感じざるものなかるべく、自ら邪念の洗滌せらるゝを感ずるならん、衝突難破を恐るゝものは、また汽車にも乗るべからず、斯の如きは寧ろ天災に屬し、何處にあるも避くべからざるもの何ぞ獨り海上をのみ恐るべき。

今社會の上流より柳澤伯の如きを出す、實に會心知己の感なくんばあらず、余素より伯の類に倣はんとするものにあらざれども、職に

新聞記者の任にあるもの、大いに海上の旅行を嚮導するのまた斯道に忠なるの道なるを思ひ、自らまづ日本海を周遊し、之を讀者に紹介し、更に讀者の中より奮發一番するものあるを待たんと欲す。北方樺太西比利亞に接し、西南朝鮮及對馬を以て限り、東南直ちに日本を以て劃せるもの之を日本海となす、その名の日本海たるが故に、何となく悉とく日本の領海たるが如き心地せらるゝのみならず實際においても外交上商業上日本に取り極めて重要な海洋にして、殊に西比利亞鐵道の全通と共に今後の日本海は直ちに歐亞交通の衝に當り、日本の死命を制するものまた日本海たらんとす、此時において日本海の智識を養成する事は眞に今日の急務なりと云はざるべからず。

机上の研究可ならざるにあらず、然れども百聞は一見に如かず、之

を炎威赫々として百事皆懶きの時に當り、心身を修養し得ると共に、悠々自適の中に日本海を研究し得るの海上旅行に比して何れぞ、且日夕書籍と親しまざるものは直にその地と接觸するの機會なくば遂にその智識を得ずして止むもの比々皆然り、海上の旅行は何人に對しても不知不識の間に知識を與へ、且容易に消滅せざるの印象を與ふ、進取的國民の忘るべからざるは實に海上の旅行なるかな。

然れども悲しむべし、今日まで日本の紳士學生等が避暑のため多く日本海を旅行するものあるを聞かず、これ蓋し海事思想の幼稚なるにも基くべしと雖も一は海上の旅行の如何に愉快にして趣味多きかを解せざると、一は如何なる方法によりて旅行し得べきかを知らざるに依るならん。

日本海を周遊せんとせば幸に大阪の大家七平氏が有せる日本海定期

(六)

線あり、年々政府より十四萬圓の補助を受け、甲乙二船を以て日本海の航路に當てつゝあり、船美にして旅客に對する設備遺憾なく且特に日本海を周遊せんとする旅客のために便宜を與へあり、單獨にて行くも可、家族を同伴する最も可、將た必らずしも全線を一周せざるも可、之を内地の温泉宿、海水浴場等の如き小天地に於いて醉を買ひ花を弄し、而して何の得る處なきに比し、紳士の避暑としてその名の如何に美に、その遊の如何に壯なるや。

余は即ち自ら暑を日本海に避くると共に知らざるものゝために、海上の智識と船中の生活とを語るべく、八月四日敦賀出帆の日本海定期航海船交通丸に乗込み、七尾、伏木、新潟を經、碇船する毎に各地の勝を探りつゝ函館に出て、函館より室蘭に航し、室蘭より内地に入り札幌を見、小樽に入り、小樽より再び交通丸に運ばれて浦鹽

(七)

斯德に航し、止まる事數日の後元山に航し釜山に航し、門司に來り更に濱田、境、宮津を經、約一ヶ月にして敦賀に復航せんとす。余の目的たる素より政治上の通信をなさんがためにもあらず、經濟上の取調をなさんがためにもあらず、將各地の社會觀察をなさんがためにもあらず、要はたゞ避暑のために漫遊を試むるに外ならず、而して悠々自適の間暇目の風光及目睹耳聞せる處は余が紀行の筆に上りて讀者の目に新たなる所のものあらん事を期す、幸に日本海の趣味を讀者の一部に注入し得ば足れり、日本海周遊の途に上るに當つて所感を録す。

### 船中生活の趣味

余の日本海を周遊し來り、敦賀に歸着するや知人先づ余を迎へて曰

(八)

く、船の中はさぞおもしろかつたでせうと、更に敦賀より大阪に歸れば、近隣の人々また余を迎へて、船の中は随分苦しかつたでせうといふ、遂に一人の船中の快樂を問ふものなし。船の中は實に愉快です、と余の答ふるに對して彼等は殆んど呆氣に取られ余の顔を打守るのみ、宛がら余の言を信ぜざるの態度を取れるにあらずや、依つて思ふ、船中生活の趣味は未だわが國民の多數に解せられざるなり、普通の人は船中の生活を以て苦しさもの、窮屈なるものとして解釋せるが如し、日本は海國なりと稱せるに海上の智識に疎き事斯の如くなりせば、海事思想の發達は前途猶甚だ遠しと云はざるべからず。

蓋し常に京阪人の目に觸るゝものは淀川通ひの汽船なり、川口より發する淡路通ひ若くは内海近廻りの小汽船なり、思ふに此等の汽船

(九)

より割出して船中の生活は總て窮屈なるもの、苦しさもの、無趣味なるものと推斷し、その觀念がまづ先入主となれるものならん、まづ此先入の觀念を打破せざれば、海上の樂を鼓吹するの前には、常に一大障害に遭遇するを見るなるべし。

常に目に觸るゝ處を以て他を推すは人情の當然ながら、九尺二間の裏店は以て大厦高樓を推すべからず、一二百噸の船を以て何千噸の船を推すべからざる、また明白なるにあらずや。

試みにわが乗れる交通丸に就て語る事を許せ、交通丸はその噸數一千六百噸強、大洋を航するの船として決して大なるものにあらず、日本海定期航海船としても寧ろその小なるを憾むものなり、然れども旅客に對するの設備においては頗る勉むる處あり、一二等のサロンの如き極めて清潔にして裝飾また之に稱ひ、之を有數の西洋料理



店に於けるサロンに比して遜色なく、四時の花木は常に各寄港地より取寄せられ、船内のそこ、を飾りて少なからず旅客の眼を慰め、或は圖書寫眞の客の縦覧を待つあり、船室の如き、必らずしも窮屈なるを憂へず、船室付のボーイは注意周到にして善く客のために便す。

一二等共に浴室の設あり、同時に二人を浴せしむべき程の湯槽に波々と湛へたるを、一等客に對しては一人毎に代ふるが故に、その清潔なると云はん方なし、但し船中なれば淡水を用ゆる能はず、取水唧筒をもて海水を汲入るゝものなるが、之に蒸氣を通ずる事、僅かに五分間にして適度の温を保つに至る、一等客は日夜何れの時なりともボーイに命じて浴を取り得べし、即ち客は船中にありて日々海水浴をなし得るものなり。

甲板は運動遊戲の場としてその狭きを憂へず、輪投の戲の如きは最も客の好む處、椅子あり長椅子あり、寢臺あり、以て書を読むべく、風光を賞すべく、友を求むべく、語るべく、休息すべく、はた華胥の夢に入るべし、夜は電燈煌々として甲板の上に輝やく。渴する時は茶、珈琲可なり、ビール呼ぶべく、ラムネ平野水命ずべし、涼風甲板に吹満ちて、すべて飲むもの食ふものゝ味を美ならしむ。

交通丸に二三頭の飼犬あり、下甲板にありてよく人と戯むる、籠にカナリアありてこれもまた旅客のために歌ふ、船中自から呑氣なり。船中生活の趣味は最も夏時に於て發揮さる、一たび船中にある時は夏の何ものたるを知らず、夜間の如きは殆んどその涼に堪へざるを覺ゆ、毆米人が避暑のために、船中生活を取るもの多き誠に偶然に

あらずといふべし。  
 日本海の如きは夏時において最静穏にして陸上に風あるの時さへ海上に波を見ると少なく、婦人小兒と雖も尙その航海に適す、況んや寄港地多くして二日間連続して船にあるが如きは、僅かに浦鹽斯徳に向ふの際なるのみなるをや、余は中流以上の紳士が續々海上に避暑旅行を企だて、船中生活の趣味を一般に鼓吹するの縁とならん事を希望して止まざるなり。  
 歸來感ずる處ありてこゝに船中生活の一般を語る。

目次

第壹編 北陸沿岸及ビ北海道

(一)

一	敦賀	一
二	金ヶ崎懐古	四
三	松原の逍遙	一〇
四	海上の夜暗中の船	一五
五	七尾	一九
六	和倉温泉行	二三
七	伏木その今昔	三二
八	舟を有磯海に浮ぶ	三六
九	海天の落日	四三

(二)

十	驚ろくべき新潟	四七
十一	新潟の瞥見	六〇
十二	朝市と草花市	七二
十三	津軽海峡	七六
十四	函館港	七九
十五	室蘭港	八七
十六	北海道の野色	九〇
十七	札幌	一〇三
十八	北海道における喬木の美	一〇六
十九	詩的農園	一二七
二十	小樽	一三二
廿一	断崖の碑とコロポクウングル	一四〇

廿二 アイヌ……………一四六

第二編 西比利亞

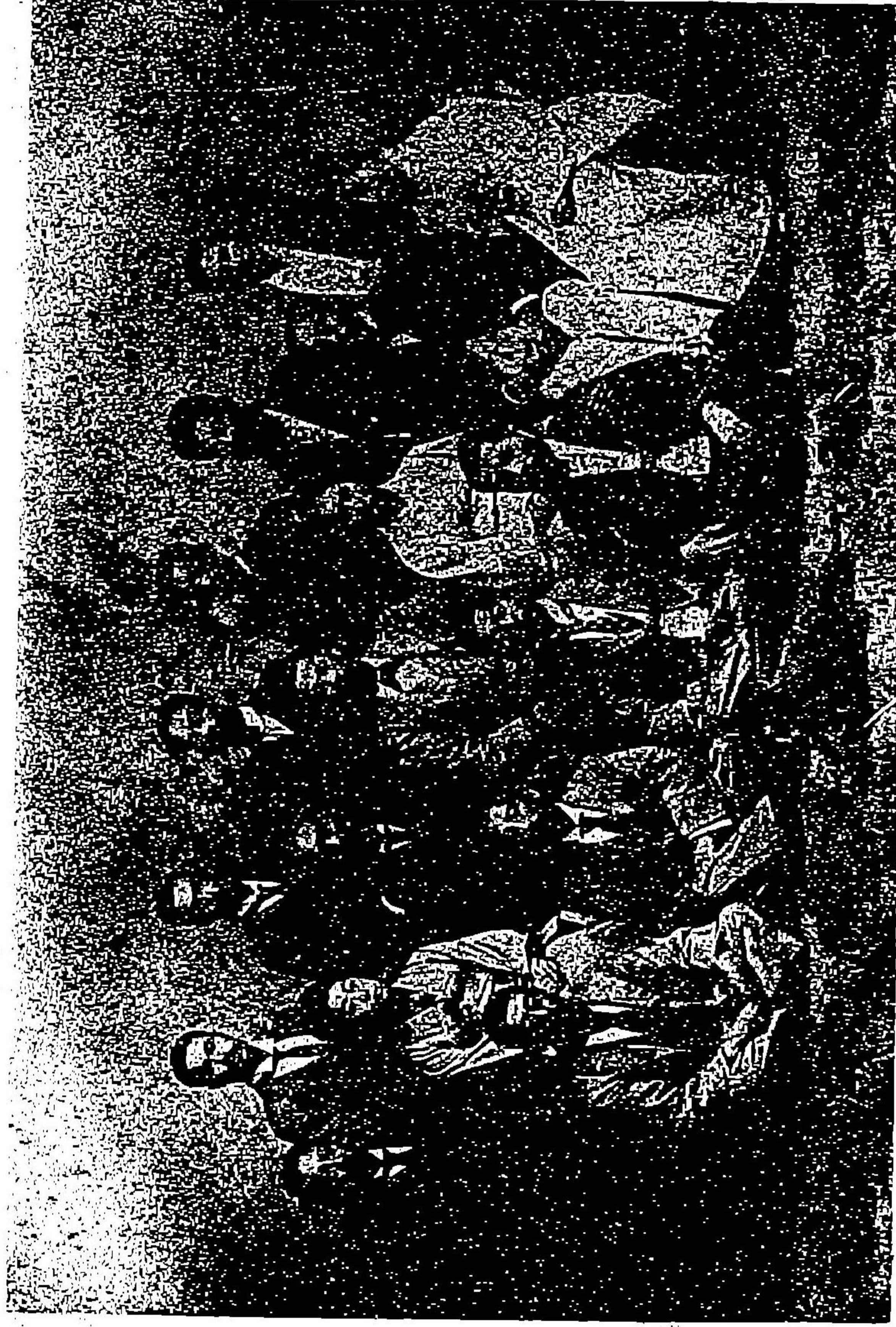
一	西比利亞の自然觀	一五七
二	西比利亞の社會觀	一七九
三	西比利亞の暗黒面	三八四
四	淫猥なる西比利亞	三〇四
五	西比利亞に於る文明の價值	三一五
六	露人雜觀	三三二
七	烏蘇里鐵道所見	三四四
八	烏拉地俄斯德	二六四

目次

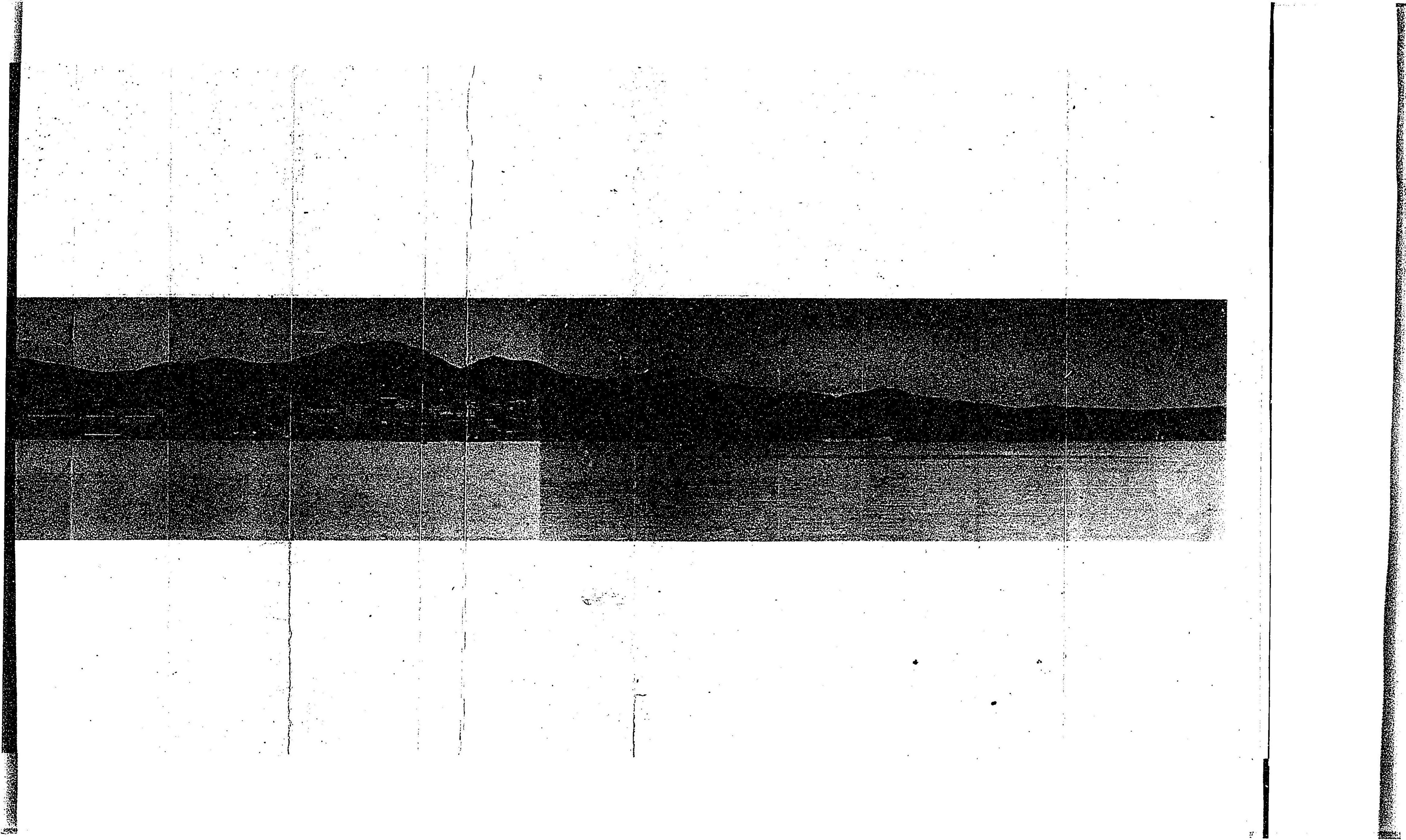
- 九 鳥港所見……………二六九
- 十 チゲエリスキー記念碑畔の落暉……………二八二
- 十一 西比利亞に於る日本賣春婦……………二八六
- 十二 日本人街の一夕賣春婦の巢窟……………三二二
- 十三 ニコロスク……………三一八
- 十四 ニコロスク停車場……………三三二



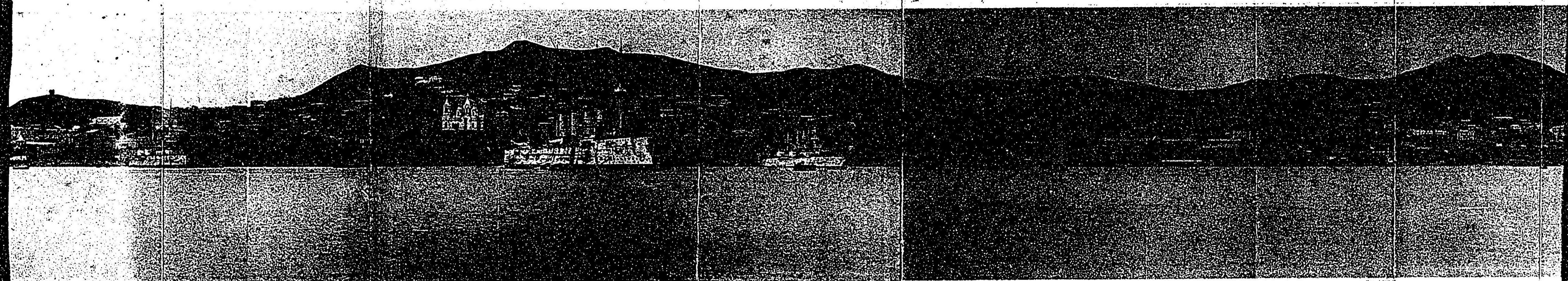
島港にて撮影せる紀念寫眞



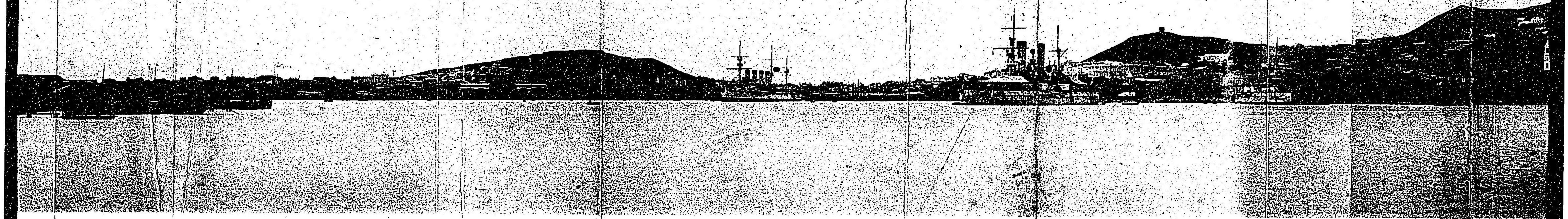
氏邸次房村下はなる中央中段中、主店浦杉主店商等一の港島は右の者茶、者茶は目番二より方左段下  
座銀京東は目番二より方左段上、長船丸旋帆野矢はるれ隣、人夫浦杉は方右、長船丸通交原吉は方左  
丁略他其、兵安村下官記等信懸はるれ國に右、主店計時部頭



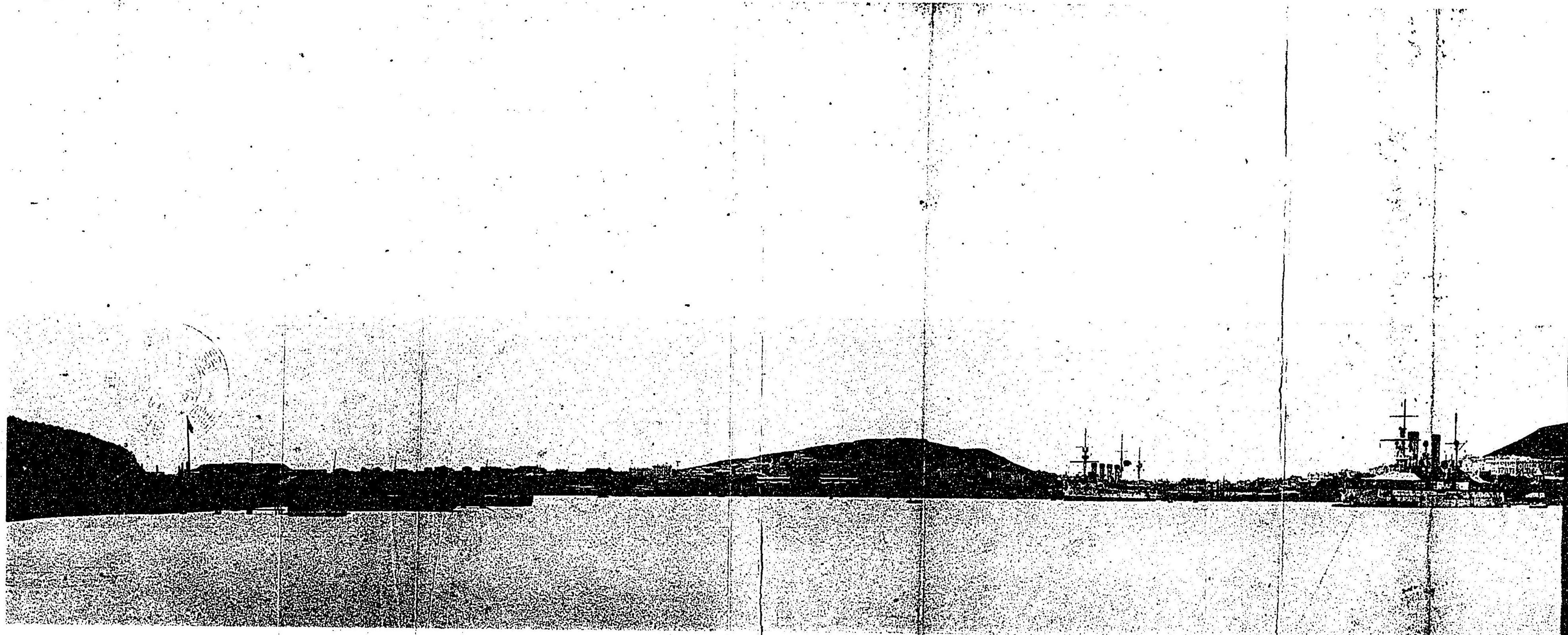
烏拉地俄斯德全景



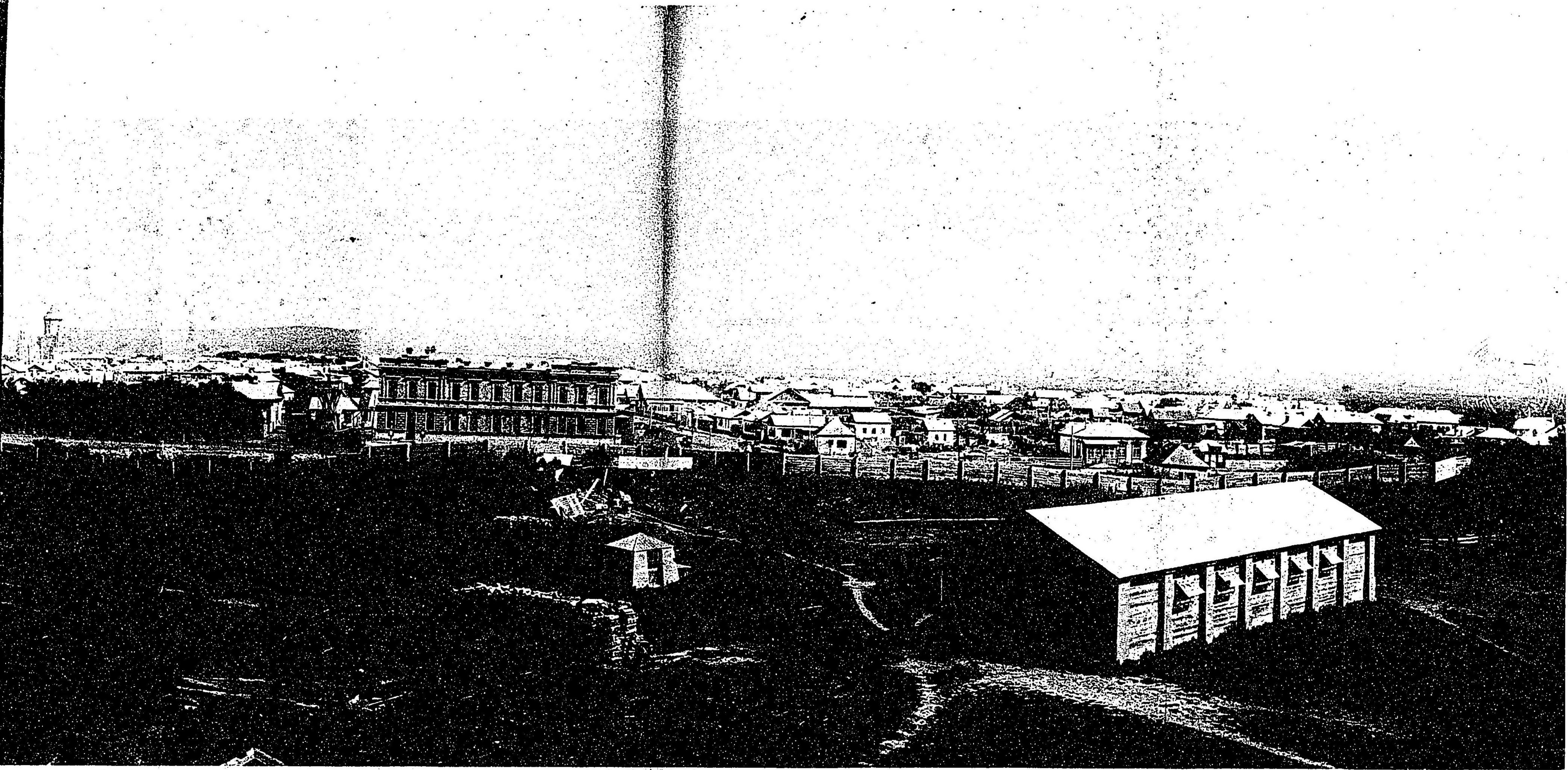
景 全

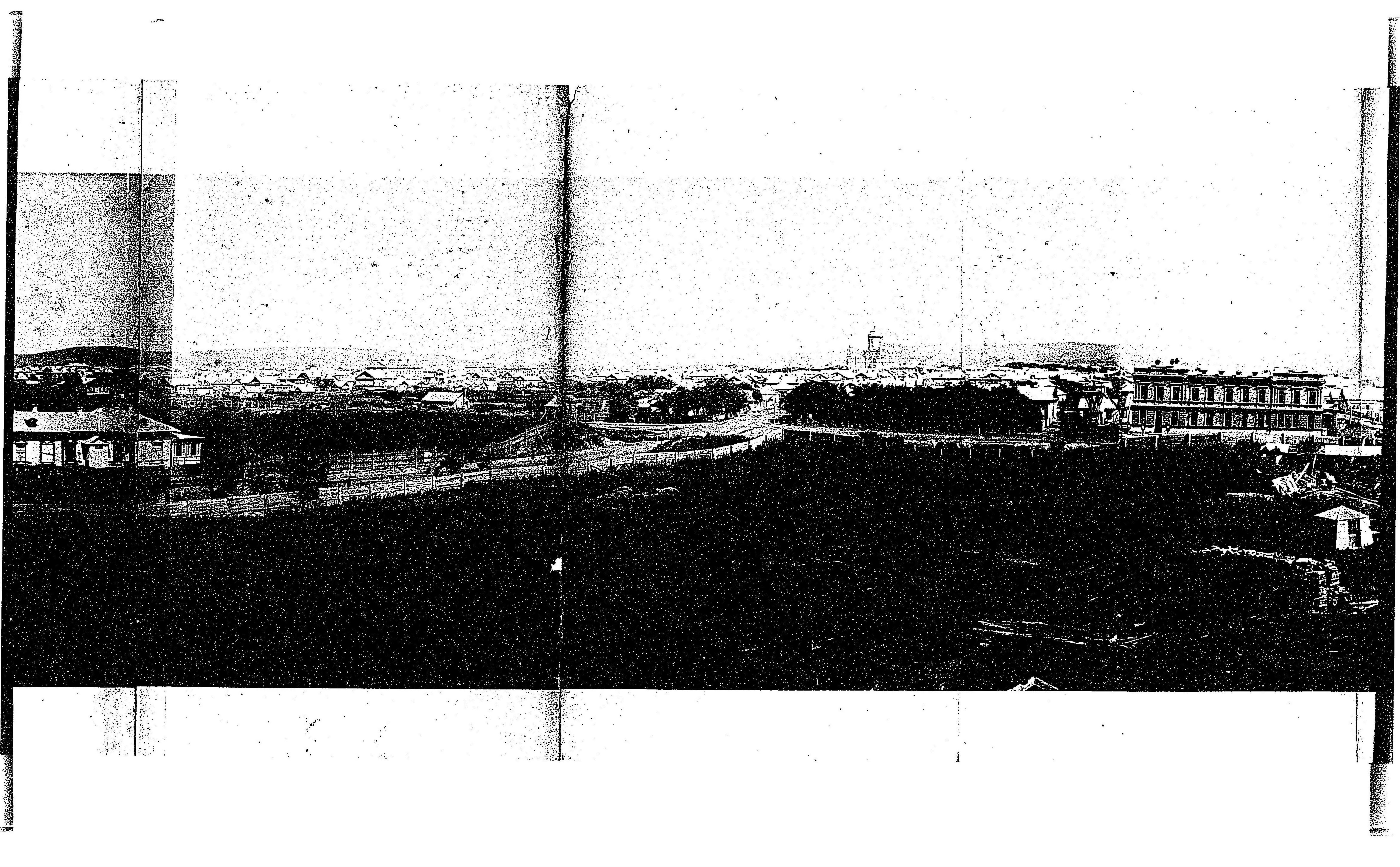


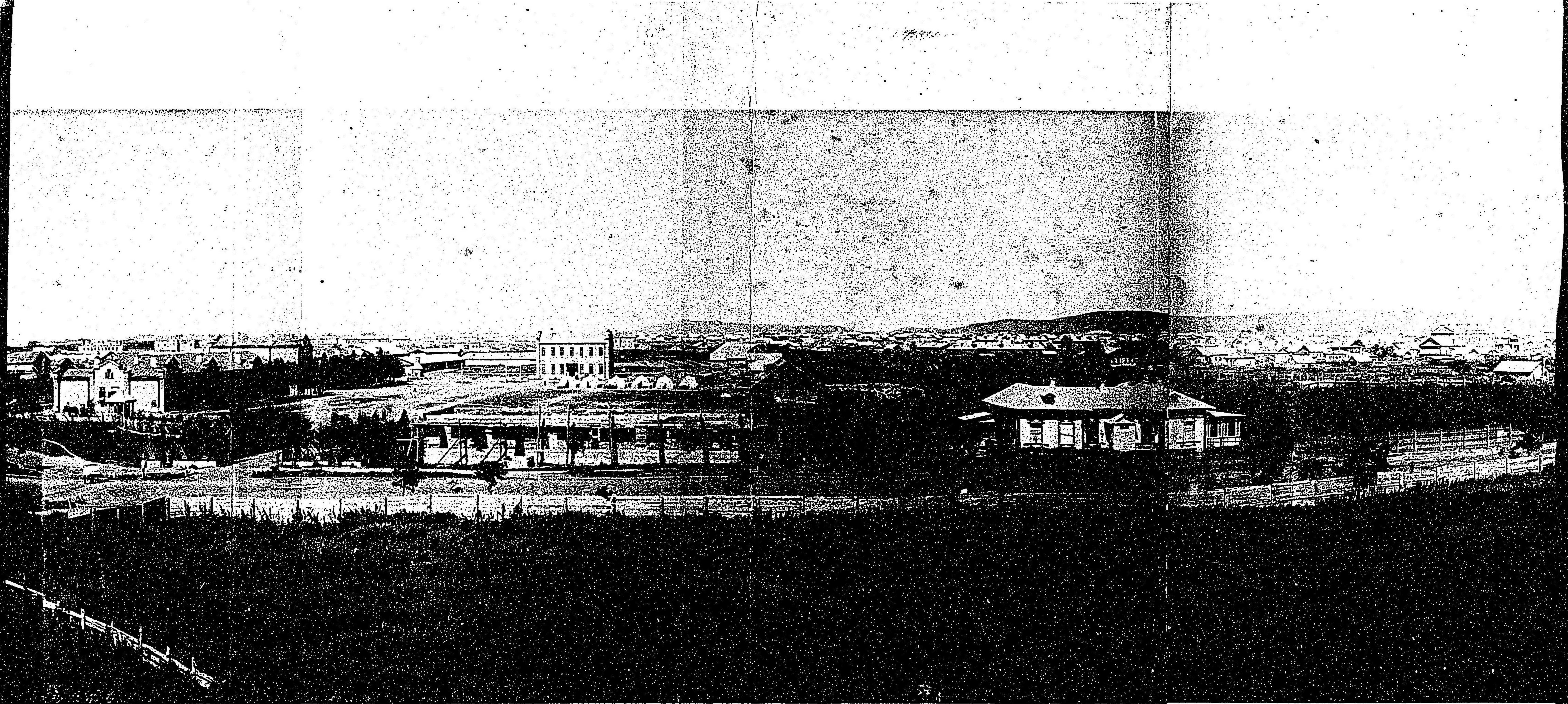


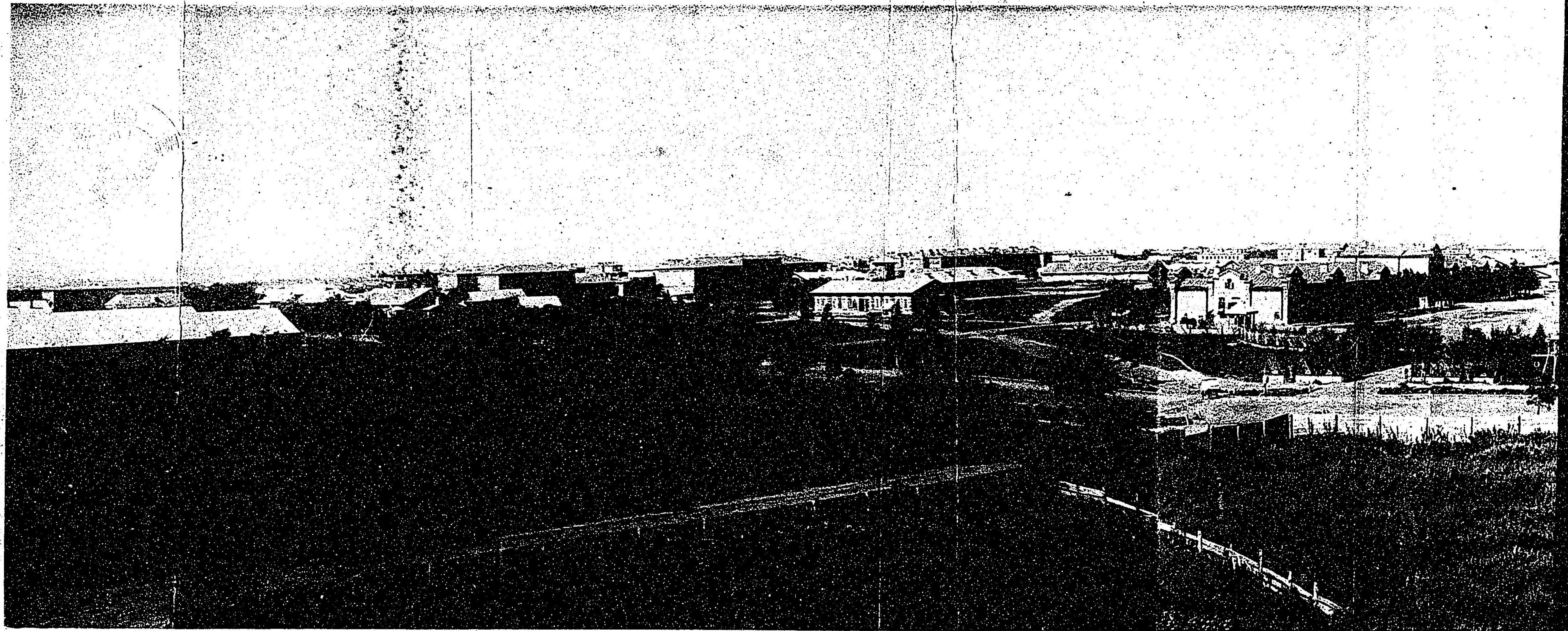


ニコリスク全景









# 日本海周遊記

菊池幽芳

## 第一編 北陸沿岸及び北海道

### (一) 敦賀

余は周遊記を草するの順序として、余の出發地點なる越前敦賀についで少しく記す處あるべし。

敦賀は日本海における著名の港灣にして、一面敦賀灣を抱き、三面は皆山に包まれ、東の方に木芽峠、鉢伏山あり、南の方に乗鞍、利根の連山あり、西若狭の境には三國、野阪、榮螺の高峯あり、書如き天筒山は直ちにその背景となり、水清き筈の川は市中を横断し

て海に入る、人口一萬六千餘。  
 敦賀は古へ氣比の浦と云ひ、後角鹿と稱せしを更に訛傳して今の敦賀となる、仲哀天皇此地に行幸し、行宮を興して筥飯宮といふ、天智天皇の時敦賀と近江との間に有名なる愛發關を設けらる、所謂日本三關の一なり、聖武天皇の朝湖海國の使者を待たんがため、敦賀の松原驛に松原客館を置く、敦賀は古へより三韓と交通の衝に當れるものにして、その貿易港としての由來既に久しきを知るに足るべし、況んや北海と京畿との交通貨物の運搬は、殆んど全く此地に依りたるものなるが故に、敦賀の隆盛は實に想像するに餘りあり、嘉永年間氣比神宮に奉納せられたる敦賀灣の古圖を見るに、帆檣はその數を松原の松と争ひ出船入船は千鳥の飛去り飛來るに似たり、蓋し當時の實況なるべく『日本永代藏』に

『越前敦賀の湊は毎日の入船判金一枚ならしの上米ありと云へり、淀の川舟の運上にかはらず、萬事の間丸繁昌の處なり、殊更秋は立續く市の借屋、目前の京の町、男まじりの女尋常にその氣質北國の都ぞかし、旅芝居もこゝに心をかけ巾着切も集り云々』  
 また以て當時の敦賀を描き出すに難からざるべし、然れども今日にては著しく衰頹しました當時の風情を止めず、市中の有様を見るに活氣なく、その昔蝶千鳥に紛へたる出船入船の面影は僅かに之を二三艘の西洋形帆船に見るのみ。

氣比神宮

余は交通丸に乗込たる前日敦賀の西野子に導びかれて氣比神宮に賽しぬ。

氣比神宮は敦賀町曙にあり、官幣大社にして所謂延喜式内の古社な

り、北國無比の大社と稱し、御食津大神仲哀天皇神功皇后等七座の神を祀る、丹塗の大華表は嚴島神社の大華表と相如き、土佐の國産する處の檜の大木一本を以て造れるなりとぞ、昨年特別保護建造物に指定せられ、同時に大修繕を遂たり、遣唐使派遣のころより代々皇室の崇敬厚く屢々勅使を遣はされ、菅公もまた勅使として幣を奉りし事あり、今も菅公手植の梅とて存ぜり、社頭の繁昌嚴島に超えたりと聞えたるに今は他國へも聞こえず、はた古へは老松古杉社地を蔽ひいと神寂びたる幽境なりしを、去る年の大洪水と大暴風との爲に、松枯れ杉倒れ、残れる木立蕭條として、甚く風致を損ずるに至れるこそ口惜し。

(二) 金ヶ崎懷古

氣比神宮を出て金ヶ崎神社に詣づ、金ヶ崎神社は天筒山の一脉敦賀灣に斗出し、金ヶ崎の岬をなせる山崖にあり、祠のある所即ち金ヶ崎城の遺趾なりといふ、後醍醐天皇の皇子尊良恒良兩親王を祭れるなり、石磴の半ばより少しく右に登れる處に攝社絹掛神社あり、これは同じ延元の役に殉ぜる藤原行房、新田義顯、氣比氏治、爪生保等の靈を祭れるもの、祠の傍延元古戰場の碑を建つ。境内に櫻と楓多く、春は吉野の宮の故事を偲ばせて、一夜の嵐にかつ散る皇子等の散際脆きを想はしめ、秋は一片の丹心王事に殉せる諸將の血もて木木の梢を彩るかと思はしむ、地高くして仰げば天筒山の翠、袖に滴らんとし、颯と落し來る青嵐、人の鬢髪を掠め、鷗が崎を掠めて、敦賀灣に落つるの時、碧紺の水左右に靡きて一路白銀を流せるが如し、わが爲には懐かしき松原の松青灣を隔て、横に



白砂を纏ふの帯となり、野阪榮螺の高峰歴亂として、或は雲を扱き或は雲に隠れ逆まに影を敦賀灣に醜す、一角遙かに出て、灣を抱くものは立石の岬にあらずや、嘗て碧血を流せるの地風光一に何ぞ可なる。

余低回願望覺えず潜々として涙下る、金ヶ崎城没落の歴史は實に何人をも流涕せしむべき悲劇にあらずや。

思ふ延元二年冬十月、新田義貞東宮恒良親王、一宮尊良親王を奉じ北國に赴むに恢復を謀らんとす、供奉の人々は誰そ、洞院實世、同定世、藤原行房、同行尹、三條泰季等の公卿に義貞、義顯、脇屋義助等の一族郎黨併せて七千餘騎、木芽峠にて大雪に逢ひ、士卒凍死するもの多く、漸やくにして敦賀に着けば、氣比宮の祠官氣比氏治等迎へて金崎城に入る、その月二十日といふに義貞兩宮をば船に誘

ひまゐらせ、漁舟一蓬の月を載せて管絃の御遊を催けし、越路の空の草枕逆旅の御情を慰め奉る、げにやかゝる時にも風雅を忘れざる延元武士の面影を今も移して年の十一月には御船遊びの神事をなすといふ、既にして尊氏大舉して金崎城を圍ましむ、延元二年に至りて城中漸やく食竭き、馬を殺してその肉を食ふに至りぬ、義貞更に兵を擧んとし私かに城を出て杣山に赴むく、されど事志と違ひ在苒の間に城中の食全く盡きぬ、敵之を知りて遂に城中に攻入る、由良長濱の二將新田義顯の前に進みて急を告げ「今はこれまでなれば御自害あるべしとこそ存じ候へ、その程は我等防ぎ矢仕るべし」と言終りて取つて返せるに二人餘りの疲勞に足も快よく立たず、死人の肉を食ひそを力にして戦ひぬ、義顯一の宮尊良親王の御前にまゐり「今はこれ迄とこそ覺え候へ、我等弓矢の名を惜む家にて候間自

害仕らんずるにて候、上様の御事はたとへ敵の中へ御出候とも失ひ進らするやうの事はよもあらず、只かやうにして御座あるべしとこそ存じ候へ」と申上れば、宮は快よく打笑ませ玉ひ、「否とよわれ汝等を失ひ存らへて何かせん、敵に辱めを受んよりは命を白刃の上縮めて、怨を黄泉の下に酬ひんには如かじ、自害をば如何にするものぞ」と思入つたる仰せの程を聞きて義顯感涙止めもあへず、かやうに仕るものにて候と云もはせず、刀を逆手に持ち、左の脇につツ立て右の脇の肋骨二三枚かけて掻破り、その刀を抜きて宮の御前に差し置けば、宮はやがてその刀を取り、雪なす御膚を現に、ぐサと御胸のあたりに突立て義顯が枕の上に伏させ玉ふ、頭太夫行房以下いざゝらば宮の御供仕らんとて一度に皆腹を切れば庭上に並居たる三百餘人の兵士、互に差違へく、いやが上に重なり死しぬ、これ

太平記の傳ふる處、かくて金ヶ崎城は遂に陥りぬ、これより先き氣比齋晴御年まだ十五にて渡らせらるゝ東宮恒良親王をば小舟に乗せまゐらせ、蕪木浦に落しまゐらせたるを、無慘や夜明て足利の武士に捕へられ、やがて京師に送られて、四月十三日といふに足利直義の進めたる鳩毒のため果敢なく蕾の花を散らさせ玉ひぬ、之を金崎城没落の哀史とす。

事の悲惨なる斯の如きはあらず、我今來りて金ヶ崎の一角に立てば江山蕭條として陰雲低く迷ひ、日色暗くして氣沈み、風死して細雨飛ぐ、敦賀灣の水面一波を擧ず、敵と見ゆる鷗もなければ、吖の聲に紛ふ松風の響もなし、烟雨淡々として海と山と静かに暮んとす、あわれ悲劇を見たるものは江山にあらずや、悲劇を語るものは江山にあらずや、われ一たび江山に對して相識の如し、頭を擧て山を見

頭を垂れて海を見る、之を久しうして踟躕去る事能はず。

(三) 松原の逍遙

四日の朝余は敦賀の原、西野の二子と共に松原に遊びぬ。松原は敦賀の西端松原村にあり、海濱一帯の松林をいふ、東西八町南北六町餘、四時の逍遙に適し風光の明媚を以て稱せらる。來迎寺より入りて松原に出れば入口に當りて、水戸の名士武田正生藤田小四郎等三百七十餘人の墳塋あり、その前面に松原神社ありて即ち正生等を祀れり、その神號は明治八年 陛下正生等の孤忠を憐れみ下し賜はりたるものなり。墳塋のある處は當年幕府が正生等を斬に處したるの跡にして、今は高く壇を築き耕雲齋の碑石を中にして左右には田丸稻之右衛門、藤

田小四郎、山國兵部以下の碑石並列し、繞らすに石垣を以てせり、壇の下に碑あり、碑文は籠手田安定の選ぶ所、碑石は常陸の名産笹班寒水石より成り水戸侯の寄附にかゝる、寒水石は即ち大理石にして余の郷里水戸における碑石の最上なるもの皆此石を用ゆ、關西に於ては多く見るべからざるもの、此石を見るさへ余は坐ろに望郷の思に堪へざるに、そは余が幼少の頃より屢々之を父老先輩の口に聞き、敬慕措く能はざる武田正生以下の碑石なるを見るに至つて、低徊踟躕長く去る事能はず、俯して碑を撫し仰いて壇を望む、壇上芝滑らかにして一本の松あり、枝低く垂れて碑を蔽ひ、梢に颯々の音を聞く、只見る松下の芝生に撫子の花あり、莖細くして花の重さに堪へず、寂寞として浦吹く風に點頭す、そもくまた何の領く所ありや。

思ふに幕府の末葉國勢萎靡、上下安きを偷み、士風地に墮ちたるの時、正生等烈公の遺志を續ぎ勤王の大義を唱導して義旗を翻へし、寡兵を以て屢々幕府諸藩の兵を破り、遂に長驅西上して京都に向ひ一橋中納言によりて衷情を天關に訴へんとす、正生以下僅かに三百餘人、衆寡敵せず、糧食繼がず、而も元治元年十月廿七日常陸の久慈を發し下野路にかゝりてより十二月初旬越前路にかゝれるまで恰かも無人の地を往くが如く、諸藩の兵皆震駭し、敢て善く抗するものなし、その過る處秋毫も犯すなく、令嚴にして三百の武夫手の如く足の如し、大將は耕雲齋その年六十三、參謀は山國兵部その年七十二、之を聞いて懦夫をして立しむ、何ぞその壯なるや。蓋し正生等を京都に入しむるは幕府に取て當面の打撃なり、幕府則ち大いに諸藩の兵に命じ之を越前に扼せしむ、その總大將は誰ぞ、

一橋中納言。

若夫正生等にして破竹の勢に乗じ、その所期を貫かんとせば、京都の地只山を隔つるに過ぎず、諸藩の兵多しと雖も之を破つて洛に入る、蓋し易々たるのみ、然れどもその總大將はわが依つて以て衷情を訴へんとする一橋慶喜公にあらずや、則ち義において戦ふべからず、正生等涙を呑んで遂に加賀の軍門に降る、あゝ此間の心事を察するもの誰か一掬の涙なからんや、況んや無情の幕吏加賀藩の優遇周旋を排して、彼等を斬に處し、將たその首を梟するに至りたるをや。さはれ正生等松原の露と消えてより僅かに十數年にして、その靈は既に松原神社として風光明媚の地に祀らる、死して餘榮あり、また以て瞑すべし。

松原の祠に衰して松原の中に進めば、始めは小松繁く苔碧なるに萩  
 夥しく茂りて、秋色の憐なるを思はしめ、やゝ進めば砂次第に白く  
 松疎となりて、木は次第に太く、海仄見えて漸やく海邊の趣致を呈  
 し來る、こゝに征清紀念塔あり、少しく進めば去明治十一年陛下御  
 駐蹕の碑あり、この邊の風光最もよく、敦賀灣を隔て、斜めに天筒  
 山、金ヶ崎に對し木芽峠をその左に望む、一帶の連峰或は紫に或は  
 翠に、近きもの遠きもの錯綜して影を青灣に落す、顧みれば松原の  
 背景に高く野阪山あり、松原の松年古りて枝振面白く、葉青く砂白  
 さが間に太き幹のみ見渡され、その限を知らぬなど、ヌーボー式の  
 模様の如くにて目も覺る心地す、この邊の松には皆一種の寄生樹あ  
 り、往々枝を枯すものあるを見る。  
 聞く土地の人は此地を小舞子と呼ぶと、されどその規模の大なる、

土地の幽邃なる舞子の比にあらず、天然の大公園といふべし、幼き  
 よりその景に馴れたるものは却てその可なるを知らず、敦賀人が小  
 舞子と呼びて甘んずるが如きは自然を侮辱するものなり、よろしく  
 大舞子と呼ぶこそよけれ。

(四) 海上の夜—暗中の船

四日午後四時わが交通丸は敦賀を解纜す。  
 夜九時船橋の上に立つ、船は今開を縫ふて加州沖を進みつゝあり。  
 夜の莊嚴は海上にあつて始めて見るべし。  
 海と空と一様に黒き中を航せるわが船は宛がら冥路を辿れるなり、  
 仰げば前面に當り巨人の如く眞黒に立てる帆檣と、これを支ふる幾  
 條の綱とを見る、帆檣の中央前面に掲げられたる燈光は、朧ろに前

部の帆網を照してことさらに帆樯を黒からしめ、無数の星は紅玉を掴んで帆樯に抛ち散じたるが如く、爛干として特にその邊に繁く、帆網と星と高きは船橋を蔽へる天幕に遮ぎられ、低きは即ち脚下にあり、右舷は北極星を指さし、帆樯は豎に北斗七星を貫く、銀河北極星の右に起り、斜めに船を横ざり、左舷船尾に當りて、低く海に落つ。

北韃靼海峡より吹來る長風、蒸地にわが衣髪を掠め、較もすれば船橋の上より我を吹落さんとす、顧みれば口径六尺の大煙筒より吹下す黒煙銀河と並行して、直ちに黒闇々の海に突入するを見る、假へば間中に物あつて銀河と黒煙とを吸ふが如し、真にこれ畏るべきの崇高！

漁火あり、遠近に明滅す、或は點々として散じ、或は列をなして横

はる、加賀能登の沖に鳥賊を漁れるなり。俯して船腹の波間を見ずや、こゝにもまた思ひがけぬ美觀を見出すべし、何ぞ、燐光の發散之なり、船舳に碎かるゝの海面激して白波を擧ぐるの時、白波擴がりては折返り、その外縁忽ち燦として燐光を發す、燐光は半月形を描きて、廣がり、消え、散じ、そのパツと廣がる時は光、時に船橋に及び海底も見え透るかと思はる、此燐光には夜によりて明暗あり、後余の檢する處によるも此夜の如く甚しきは無りき。

かくの如きの夜試みに船尾に立ちて船の過ぎ行く跡を見よ、暗黒の水面スクリユに激せられ、幅二間許り眞白に湧返れる水は、浴々瀑流の如く奔注して、遠く黝冥の天に向つて連り、大煙筒より吹下す黒煙は畧之と併行して、また遙かに黝冥の海に向つて下り、こゝ

第一編 (海上の夜、暗中の船)

に白黒二條の凄じき流は、寂寞として死せるが如き大海に苦闘せる  
 を見るべく、更にこの二個の流を隔つる事左右各七八間にして、猶  
 かの半月形の燐光の消え且つ生ずるを認むるならん、人をして眞に  
 人生の光景にあらざるを疑はしむ。  
 更に船橋に返らしめよ、橋上火を點ずるを許さず、僅かにテレグラ  
 フを照らせる火光のみ仄くらく、只黒く見ゆる船長と運轉手とが時  
 に相呼應するを聞く、偶々コオタマスダ一來りて船の何哩を來れる  
 を告げ去る、何等の寂寞。  
 天地冥々として眠れる中を、我船獨り微光を載せて暗より暗に行く。  
 暗中の船何を其妻絶にしてまた詩趣多きや。  
 暗より暗に行く船は實に人生の説明にあらずや、その微光を認むる  
 は僅かに相過ぐる瞬間のみ、何處より來り何處に去る、共に知るべ

からず、憐れむべき哉。  
 あれ獨り船橋にありて、何ものかの叫きを聞く心地す、我と神と甚  
 だ遠からざる心地す、時と空間の觀念を失はしめたる事今宵の如き  
 あらんや、現世にありて過去にあるが如く、更にまだ見ぬ世界の消  
 息を窺ひ得るか如き心地す、少なくとも我は人世と一步を隔てたる  
 を感ずるなり。

(五) 七 尾

五日眼を覺せば雨聲を聞く、昨夜は星の降るほどなりしを、測り難  
 きはこの頃の天候なるかな。  
 午前九時半船七尾灣に入り、能登島を右舷に見て進む。  
 雨も小降となれるを幸ひに甲板の上に昇る、雨の七尾灣また風光に

富む、七尾の市街既に烟雨の中に望むべく、後に淡く紫翠を曳けるは城山なるを知る、昔し不識庵が槩を横へて詩を賦せるの處、英雄颯爽の風姿今何處にか尋ねん、白雨青山を洗ひて斷雲空しくその腰を繞る。

能登島の前面、二三の高く骨立せる小島を認む、上に榊松夥しく繁りて、その下の地盤は抉り取られたるが如く一草を存せず、之を望めば青天鵝絨の卓被を蔽へるが如し。

船の進むに従つて景色次第に展開し來り、七尾の人家漸やく分明に能登島と能登本國と僅かに一草水を以て相接する、所謂屏風峽の奇景を遠望し得るに至つて、景色の變化こゝに盡き、船もまた正に投錨の地を求めんとす。

十時半通船により船長機關長等と七尾に上陸す。

七尾は戸數三千弱、人口一萬一千餘、北陸屈指の良港なれども灣口に暗礁あり、夜間は此港に出入する能はず、また灣口より入り來るも一直線に七尾に向ふと能はず、迂餘曲折の進路を取らざるべからざるが如き、この港の大いなる缺點なるべし。

七尾の名は城の山の山脈七岐に分れ尾を垂るゝが如くなるより名づけたるなりと云ふ、菊尾、松尾、虎尾、龍尾、梅尾、竹尾、龜尾等はその七岐の命名にして、七尾は即ち七岐の海に接する處に當れるなり、城山は古へ七尾城のありたる處、累世島山の居城なりしを天正五年上杉謙信、攻めて之を陥る、會ま中秋十三夜に當り、酒を城中に置しめ、能州景を併せ得たるを吟ぜる、普ねく人の知る所。能登島は周回十四里、七尾灣内に横はりて南灣北灣を分ち、また七尾灣の風致を添ふ。



七尾の産する處は、蕨、細、海參、七尾酒、蕨と細は此地より夥しく北海道に輸出さる、鯨漁に用ゆるなり、名物は何ぞと問へば、七尾の蕨山祭禮こそ最も有名にて、一度も見ぬ馬鹿二度見る馬鹿との諺さへあり、遠國より見物に来るものさへ多しと、土地の人は語る。余等一行は一先大家代理店なる榎瓜商會に至り、暫らく會談せる後船長等は和倉の温泉に遊ばんとて、雨を犯して車を驅り去る、余は七尾の町を見て行かんとて、後より赴むべき事を約し、商會に留まり、主人榎瓜讓太郎氏に伴はれて海岸の料亭青海樓に晝餐を取る、此地の料亭皆魚を海中に圍ひ置くが故に、その美味よく人の舌鼓を打しむ。市中も見物し終りて、いざ和倉に向はんと、再び商會に引返し來れる時、事務長も來り合せるを誘ひ小蒸氣にて屏風崎の景を探りつゝ

行かんと、三人埠頭に出れば今しも出帆せる後なれば、詮なく車を雇ふて和倉に向はしむ。

(六) 和倉温泉行

(上)

和倉は七尾を西に去る事二里の海岸にあり、道路坦々として車を通ずべし。七尾を出て十町餘り西小島と云へる處に妙觀院と呼べる一字の寺院あり、本堂は一昨年祝融の災にかゝりたれど境内自ら別乾坤をなせりと聞き、車を駐めて之に過る、この邊の海岸平蕪波打際まで開けて、岩といふ岩の岸に立つものさへなきを獨り妙觀院のある處のみ奇しくも珊瑚巖の如き一面に虫ばめる岩の時てるを見る、その門に

當るの巨巖、形猊の偃僂せるに似たりとて名づけて獅子巖といふとかや、門は則ち巖の中を穿ちて築きなせる、唐風の樓門にして樓上には辨財天を奉祠せり、門を入り巖を刻める磴道を攀ぢて之に賽すべし、更に磴道を上る事十數級にして鐘樓あり、また少しく上れば觀音堂に出づ、老樹蒼鬱として日を蔽ひ、七尾灣の波脚下に寄せ来る、嵐光水影また凡境にあらざれども惜むらくは海岸一帯の地不潔にしていたく風致を損ずる事を。  
また西する事凡そ一里の途上に赤浦潟あり、周回一里餘、形瓢の如く細流によりて七尾灣に通ず、ここに架したるを松百橋といふ、漁家蘆洲に點綴し四手網雨に烟りて動く、橋上の雨景また愛するに堪たり。  
程なく和倉につき、かねて約せる小泉館に至れば船長機關長等は既

に午睡の夢を食ぼりつゝあり、余は事務長と直ちに浴衣を呼びて湯に投ず。  
和倉は舊湧浦に作り、海中より温泉の湧出せるによりて名づく、維新前後まではその周圍を填立て湯室を築き僅かに舟もて之に通はしむるに過ぎざりしが、去明治十三年獨逸に萬國鑛泉博覽會ありたるの際之に出品し世界第三等の名を博したるより、忽ち世に知られ浴客の來り訪ふもの多きより、盛にその周圍を埋立て遂に陸地と連絡せしめ、以て今日の盛を見るに至れるなりといふ。  
温泉は百八十度の温度を有する熱鑛泉にして、其味非常に鹹く、濕疹、癩癧その他慢性内臟諸症に適し、また之を合嗽劑とする時は大いに咽喉を健全ならしむべしといふ。  
温泉宿には和歌崎、小泉、多田、小橋等以下凡二十戸あり、家々皆

基湯より鑛泉を引て内湯とせり、温泉宿の大なるものに至つては數十の室を具へ、建築もまた之に叶ふて見苦しからず、されど尤も遺憾なるはその多くが皆海上の眺望を有せざる事なり、甚しきは眺望を姿にし得べきの家にして猶且之に無頓着なるものあるを見る、余をして露骨に評せしむれば此地の温泉宿は讀んで字の如く、只湯にさへ入れば、澤山なりとの根本思想より建られたるものなり、單に温泉の目的より云はゞ湯に入らしむるのみにて素より足る、されど温泉に来るものは必ずしも病人のみならず、病人以外のものは温泉よりも寧ろその地の新らしき風光を樂まんとするものなれば、和倉の人が折角海岸の好風景を領しながら、之に無頓着なりしは遺憾といふべし。

現に余の如き、かねて和倉の勝を聞き、心私に浴後高樓に倚つて海に對せん事を期したるもの、爲に、如何に多くの失望を感ぜしめしとするぞ。

(下)

思ふに海岸眺望の可なる處に温泉宿を建築するの餘裕今日猶無きにあらず、只基湯を去る事遠きの不便あれども、これとても導管の敷設に多少の費用を増すに過ぎるべきのみ、今後温泉宿を營まんとするものは須らく此點に留意すること善けれ。

今日他の多くの温泉宿について見るが如き、旅客に對する設備の缺點は、和倉においてもまたその多くを見る、獨り家屋建築のその法を得ざるのみにはあらざるなり、元來和倉は不完全なる填立地の上に築かれたる温泉場なるが故に、全く逍遙に適するの海岸なく、若し散策の地を求むれば僅かに後方の圓山あるに止まる、故にこの地

に遊ぶの旅客を倦しめざらんとするには、大いに他の設備に待つ處  
 あらざるべからず、幸ひにして和倉はその海上天然の風光に富み、  
 また附近に形勝の地を有する事少なからず、その設備にして完から  
 ば旅客を吸引する事蓋し易々たるのみ。  
 家々に扁舟若くは短艇を備ふるが如きもその一なり、常に風波なく  
 潮流なき鏡の如き水面、鬱爾たる小島の散點せる内海、單に扁舟を  
 浮ぶるも可、短艇競争を試むるも可、或は以て能登島に航すべく、  
 或は以て屏風峽の勝を探るべく、或は以て小島廻りを試むべし。  
 釣魚船を備ふるが如きまた新設備の一なり、身はこれ仙臺の中にあ  
 り、自ら釣得たる潑刺の魚を裂いて鱈となすが如き、眞にこれ忘る  
 べ能はざるの樂ならずや。  
 俱樂部を設けて遊戯の場とするが如きまた可なり、これ等の設備に

して少しく整ふ所あらんか、求めずして旅客はます／＼多かるべく  
 今日之の如く單に遊覽若くは避暑のために來れるものをして、三日な  
 らざるに逃去らしむるが如き事なきを得ん、見よ今日にてはこれ等  
 の設備不完全にして附近の勝地遊覽の便さへ乏しければ、客は只飲  
 食の慾を恣にし、猥りに賤業婦を呼びて無遠慮の空騒ぎをなすなど  
 醜態を演ずるものゝ多く、眞面目なる旅客に迷惑を及ぼす事極め  
 て大なり、されば温泉宿には固くこれ等の賤業婦を入るゝを禁じ、  
 賤業婦を聘するの必要あるものゝ爲には別に専門の料理店を設けし  
 むる事、これもまた必要なる設備の一たらん、こは單に和倉につい  
 ていふのみならず、蓋し最も健全なるべきの地にして不健全の分子  
 を含む事極めて多きは、なべて日本の温泉場における甚だ奇怪の對  
 象なり、斯の如きは一日も速かに改良を要すべきにあらずや。

余は端なくも温泉宿改良論に及べり、然れども和倉の缺點を論ぜんとするは余の本意にあらず、更に筆を移して和倉の形勝を補はしめよ。

和倉に浮島あり、また辨天島といふ、辨天橋を以て之に通ず、榮螺の如き小島に過ぎざれども、全島虫ばめる岩より成り、松繁き中に辨天の祠を安んず、また此地の一勝とすべし、余浴後二三子と小雨を犯して辨天祠後の岩に立つ、當面能登島を隔つる事一里に過ぎず灣は二三子の立脚地より左右に開きて、右に屏風峽を望み、左に瀬嵐の浦を見て種ヶ島机島猿島の青螺と相望む、風風きて一波起らず、鏡面拭ふが如くにして、一帆遙かに北灣の口より來る、海何を静かなる、間を置きて軽く寄せ來る波、岩の狭間に入りてコボリと音し岩につける海草髪うめかみの如く梳かれて、靡なびきまた靡なびく、小魚あり、潑しやく漣れん

として水より躍る事二回、日漸やく暮んとす、浮島の暮色また詩趣ありといふべし。

瀬嵐は和倉を去る事海上二里許、小汽船によりて赴むべし、昔七尾城主島山義則が須磨明石に擬し、歌聖人丸の祠を築き、宗祇等を延きて、松風濤聲の裡に悠遊せしの遺跡、風光今に舊容を改めず、こゝに穴居の跡なる横穴多しとぞ。

瀬嵐の海中和倉より一里にして机島あり、大小の奇岩錯落し、中に机石あり、方二間その面平滑にして鑿るが如く、別にまた硯石あり長二間幅一間許、中に墨池あり、徑約二尺、常に清水を堪へその深さ測るべからずと稱し、名づけて硯の水といふ、机石と共に神斧鬼工にして見るものその奇を稱へざるは無しといふ、大伴家持この地に國守たりしの故を以て、里人之に附會して家持の机石と稱すると

かや。  
また西に筆染の里、鹽津唐島等あり、勝景また清遊に値するといふ  
余は日なくして之等の勝を探る能はざりしを悲む。

(七) 伏木—その今昔

一行は和倉に一泊す、翌朝八時出船の豫定なれば、六日六時半といふに車を連ねて和倉を出立す。  
七時半本船交通丸に乗移れば時を違へず、一聲の汽笛、船首を回らして南越中の伏木港に向ふ。  
午前十一時船は左に奈古の海、右に有磯浦を分け、玉くしげ二上山を行途に見て、古の布師の里今の伏木港に入る、落寞たる一小港、真に人をして今昔の感に堪へざらしむ。

抑越中は北陸における最舊の國にして、伏木はその國府たり、天平十八年大伴家持越中守として、國府の如意城に入りしより世々國守の居る處となり、人口實に六萬と稱し、北陸第一の都會なりきといふ、あはれ六萬の民を有せし古都、徳川氏の世に至る頃には、その面影をだに止めず、昔しながらの二上山はあれど、奈古海、有磯浦は名にのみ残れど、断江荒磯訪ふ人もなくて漁村蟹戸と荒れ果たりと云ふを聞き、誰かまた滄桑の變甚しきに驚ろかざらむ、傳へ云ふ前田氏封を此土に襲ぐや、此港を以て北門の鎖鑰となし、一朝徳川氏に憚焉たるの時此地を利用して大に成すあらん事を期し、惴々焉として伏木の名の世に聞えん事を怖れ、轉その荒涼に歸するに任せ、はた地誌に正史にその名を抹殺する事を計り更に事實の上に、伏木を湮滅せしめんとせりと、その眞偽を知らずと雖も、榮枯轉變

の甚しきを見て、或はその基づく處あるを疑ふ。  
 伏木の名は斯の如くにして人に忘れらるゝに至りたれども、古來伏木を中心としたる越中の國は、實に大和について名所多き地として知られたり、萬葉古今の諸書を繙くものは、如何に屢々二上山礪波山、礪波關、布勢湖、多胡浦、奈古海、有磯浦、越海等の名の繰返さるゝを見るならん、これ素より山水の明媚なるによると雖も、前には家持あり、後には家隆ありて、共に越中の國守たる事多年、大にその名勝を鼓吹したるに依らずんばあらじ、殊に布勢の丸山は家持が最も愛して別業を營めるの處、當時布勢の湖の勝は畫聖もまた之を寫すを難んぜりきと傳へられぬ、されど物換り星移りて布勢の湖も今は半田野となり、また風光の騷思を繋ぐなしかや、たゞ丸山には昨年大伴神社を營み、長く歌仙の跡を名地に垂れしむると

聞くこそ嬉しけれ。  
 あゝ越中國射水の郡伏木の里、如何に其名の過去において星の如く美しくかりしよ、されど伏木を以て遂に過去の名に葬むられたるものと斷ずる事勿れ、囊中の錐は自から穎脱す、由來形勢の利を占め得たる伏木は、古へにその名を知られたるが如くに、今また漸やくその名を世に知られんとせるなり、維新の後までも尙一小漁村に過ぎざりし地は、今や北陸屈指の良港として數へられ、射水川を挿んで富山灣を控へ、陸には中越鐵道の起點となり、水陸の便無比と號し、米穀の輸出の如き、寧ろ新潟よりも多しと稱せられ、汽船の寄港するもの頗る繁く、人家日に多きを加へ今日にては既に七千餘の人口を數ふるに至れりといふ、一千年前の盛事を思へば夢想も猶遠きを覺ゆれども、伏木の面目たる又幾分を起し得たりと謂ふべ

し。  
たゞ伏木の缺點は港灣の廣さに失して、全く東北の風を防ぎ得ざるにあり、但し今日從事しつゝある射水川改修工事にして成効せば、かゝる風波に堪へ得るの良港たるを得べしと聞く、何ぞ伏木のために慶せざるべけんや。

(八) 舟を有磯海に浮ぶ

(上)

有磯海の名既に我心を騒がしむ、古來歌に散文に、或は縁語として或は名詞として、有磯海の名の如く廣く用ゐられたるはあらず、その名にチャームありて極めて耳に親しさを覺ゆるもの、獨り余のみにはあらざるべし、今われ端なくも伏木に來りて、有磯の浦を當面

に望めば、小島あり、巖あり、描ける如き海岸に散點して、その風光の凡ならざるを想はしむ、幸ひに伏木回漕店主堀田善九郎氏余がために東道の主人たる事を約し、余を有磯の浦に伴なはんとす、余の心争でか躍らざらん。

午後零時半、車を命じて太田村宇岩城に走せしむ、岩城は伏木を西に去る事二十町に過ぎず、その沿岸は則ち有磯の浦なり、漸やく近づけば道は殆んど絶壁をなせる山崖に通じ、或は低く或は高く、脚下の有磯海忽ち見え忽ち隠る、風光何ぞ明媚なる、既にして道は海岸に下り、車は一小旗亭のある處に至つて駐まる。

こゝに奇巖あり、俚俗義經雨晴らしの岩と呼び、傳へて義經北國落ちの際雨を此巖下に避けたるの處なりといふ、東鑑には「義經主従如意渡に向ふ、津守平權守こゝは守護城近く山伏とて妄



に渡るまじき旋なりとて沮む、辨慶伴りて扇をもて義經を砂邊に打倒し義經にあらざる事を示して此渡しを過ぐ、此時權守船賃を乞ふ故義經の經帷子を脱ぎて與ふ、それより六渡寺を過ぎ奈古の林を指さし岩瀬の森に宿り云々」

とあり、如意渡は六渡寺の渡にして今の伏木町伏木橋邊にありたるならんといふ、蓋し義經がその北國落の時この地を過りたるは明らかになれば、岩の形の奇なるに依りて義經雨宿りの處と附會せしなるべし。

只見る波打際に當りて無數の横巖を有せる一巨岩六個の基石の上に宛がら巨人の戯むれとも見えて、正しく打載せられあり、その下善く十人を宿せしむべく、雨宿りの石としては極めて妙なるを見る、上に孤松聳ち低く枝を海に垂る、松下に石を建て、「義經公雨はら

し」と刻めり、攀て之に上るべく、松根に依つて願視すれば、有磯海の風光總て一眸の中にあり、富山灣前に開き、紺碧の水面拭ふが如く、停繫せる交通丸と、入港中の軍艦富士と、五六の輕帆とを青灣に含み、左に能登の連山を見、右に立山を紫翠の間に望む、横巖を有せる岩、蝕ばめるに似たる岩、沿岸に、はた海中に峙ち、人は宛然一幅パノラマの中に立つ、波輕く岩に激して鷗の飛立つ時、海士が兒等の魚を求めんと相率ゐて岩を涉るの時、畫面倏忽晴を點ぜられ風光乃ち活躍す。

(下)

風光の美なるを見えます／＼舟遊の可なるを思ふ、幸ひに扁舟あり命じて有磯海に泛べ、行々伏木に向はしむ。

有磯の浦の風光が極めて佳なるは、主として二個の小島——寧ろ巖

あるに依る、大なるを雄巖と云ひ、小なるを雌巖といふ、共に他の錯落として横はり、若くは峙てる群岩の巨擘たり、骨立の岩高く海面を抜き、上に老松の翠を戴き、威容堂々として兩々相對峙せる風情、宛がら有磯海を鎮するに似たり、若し夫れ北海の颶風天を衝いて來り、千波萬波一齊に怒號し、岩を呑み陸を崩し、鞆濤澎湃として雄巖雌巖も摧けよとばかり、攻め返しまた攻め來るの時、屹然として立てる兩個の巨巖、萬竅悉く鳴り、松吼え、蘿激し、猛虎の嶮を負ふて立つが如く、大鷲の疾風に搏つが如く、堂々として戰ひ、泰然として守り、山の如く倒れ來る大濤を碎きて、忽ち濛々たる白煙たらしむるの光景に至つては、實に天地の壯觀を極むるといふ。されど斯の如き偉大の威力を有せるの岩も平生にあつては、更にその畏るべきを見ずして只その愛すべく親しむべきを見る、余の來れ

るの時風なく波なく、描ける蓬萊に似たるの雄巖雌巖、靜かに鏡の如き蒼海を抜き、松の翠を簪とせるその秀麗の姿を鏡面に映す、何ぞ佳人の新粧を理するに似たるや、余は獨り風景の優美を見て、その偉靈を知らざるなり、東道の堀田氏は曰く、二巖の最も美はしく見ゆるは雪景を以て優れりとし、月夜の眺めまた之に如くと、眞に然らん。

わが乗れる舟は今雌巖の下を過ぐ、巖岩峭立して形最も奇なるに、頂に當りよくもかくまで成長せしと思はる、一本の巨松あり、八方に枝を垂れて、章魚の足の如く全巖を蔽ひ、風致いふべからず、松間に月を懸け、また雪によつて見る、恐らくは人を羽化せしめむ。雄巖は之と七八町を隔つ、既にして舟はまた雄巖の麓に來る、雄巖の大きさは凡そ雄巖に三倍せり、五六株の松ありて、頂に生じ、そ

の下小なる辨天の祠を安んず、數羽の鶴あり、岩に憩ひ、舟近づけども立たず、螺螺、牡蠣は雄巖の名物にして味ひ最も美なりといふ、堀田氏曰く、此岩に野生の菊あり家持手植の菊と唱へ、雅人の此地に来るもの必らず雄岩の菊を尋ねと、われ大阪に歸れる後萬葉を檢せるに、野菊の事見當らず、却つて『雪島の巖に生ふる撫子は千世に咲める君がかざしに』の咏を見る、こは家持が此地にありて咏めるものにして雪島は即ち雄巖雌巖なるべく、堀田氏の菊といへるは撫子を誤りたるにあらざるなきや、録して識者の教を待つ。

舟は雄巖を一周せる後、有磯の勝も早や遺憾なく見盡したるに、やがて舟をば岸邊に回らし、松翠樹影滴り落ちんとする、沿岸峭壁の下を靜かに漕がしめて、雄岩雌岩を顧みがちに、漸やく上陸の地を求め、更にこの邊に廻させ置きたる俵に打乗り、交通丸出船の時間

迫りたればと、そこへ伏木の名刹、かの如意城の跡と聞ける勝興寺を尋ね直ちに回酒店に引返せば、出船前僅かに三十分を剩すのみ、時に午後四時半。

(九) 海天の落日

午後五時船伏木を發す。

今日は陰晴常ならず、夕方よりは雲行一しほあしくなりたるに、入日の影を見ん事の覺束なきを憾とし、獨り晩涼を追ふて甲板の藤椅子に凭れ、甕陶しく暮れ行んとする蒼海に對しぬ、時はまさに六時半前後。

面を拂つて來る風の涼しきに、無心に越の連山を目送するの時、倏忽光ありて後背より來るを覺ゆ、願れば思ひ掛ずも落日今將に海に

入らんとし、赫然として其周圍を金色とせるなり。  
 雲は全く散ぜず、日のある處只薄れて片々の浮雲をなすのみ、日の形を見るべからず、而もその周圍の浮雲は大火爐によつて、炎々の日を熔し流せるが如く、はた噴火口より流出しつゝあるラバの如く、活き、動き、燃え、耀き、直ちにまた海に流れて一直線に脚下船尾を指さし来る、蒼茫暮んとするの海は、忽ち生命を與へられて輝き人と船とまた灼々たる靈光の中に立つ。  
 乞ふ更に眸子を轉じて活耀せる浮雲の上を仰げ、落日を中心として放射せる絶大の光線、層々簇々たる斷雲の間を縫ひ、黃暈々として、一時に天を衝いて迫らんとするを見る、あゝこれ何等の壯觀！然れどもこれ瞬間のみ、眞に瞬間のみ、見る／＼層雲繁く、落日の邊忽ち活耀の色を失ひ、密雲の絶間に放射せる金色の光線薄れ、海

その榮華より奪はれ、滿天の黃暈夢の如く消えて、殘す處は海天蒼茫の色のみ、日は暗雲に包まれて、地平線下に沒せると覺し、榮華と凋落と、相來る事何を斯の如く切なる、願みて人生を思ふもの、よくその心を傷ましむるなきを得んや。  
 蓋海天の落日の如く變化に富むはあらじ、而してその靈偉の光景を活現するは多く今宵の如き斷雲多きの時とし、溫乎玉の如き落日を見るは空に片雲なく、海面に水蒸氣多きの際とす、斯の如き夕舂頭に立つて西天に對すれば、淡紫色の霞殆んど半天を籠め、徐々として沈まんとする落日は、没前二三分よりよく之を凝視するに堪へ、宛然一個の紅玉の轉下するが如く、之を月と云はんは紅に過ぎ、太陽と呼ばんは俄かに信じ難きに似たり、若夫この景に點すに五六の輕帆と、數羽の海鳥と、烟るに似たる遠山とを以てせんか船は

實に畫縷の上を走るの想あらん。  
 されど多くの場合において、入日は輕微の浮雲を伴ふ、而も入日を趣味多からしむるものは、またこの浮雲なり、落暉に伴ふ彩雲の變化は、殆んど端倪すべからず、太陽を遠ざかれる雲と空とは多く淡紫色を帯び、いよゝ、遠きは青味を加へ、近きは赤を加へて、さながら藍紫色に紅をかけたるがごとく、次第に日邊に近づくに従がつて、或は紫紺、或は紫褐等さまざまの雲の色は自然の刷毛もて染出されて、染工が苦心の跡よりも美に、そが刻一刻に變化するの迅き紫紺の雲忽ちに樺色となりて金覆輪を置き、紫褐摧けて橙黄の雲と流れ、或は茶褐色、或は黒藍色、轉々變幻し來りて、ト見れば忽ち半天の雲、樺も黄も紫も灰色も一齊に紅に變じ、滿天燃ゆるが如く海之に反射して、天よりも赤く、天と海と紅焔の中に包まるゝの時

忽焉として、紅褪せ光散じ、人をして遂に應接に違なからしむ、何等の活躍せる光景ぞ、斯の如き自然美は眞に海上の落日において始めて見るべきもの、海上を航するものは寔に詩神の恵ありと謂つべき哉。

(十) 驚ろくべき新潟

(上)

七日午前五時汽笛の音に驚ろかされて目覺れば船は既に新潟に着けるなり。  
 衣服を改めて甲板の上に出れば、船は遠く二十町の沖に碇りつゝあり、見渡せども新潟らしき市街見えねば、港らしき處もなし、新潟港は何處ぞと事務長に問へば、こゝが則ち新潟港にして、新潟の町

は砂山の彼方にありと、海岸に凄まじく堆積せる砂丘の後を指さす、帆檣林立の埠頭に來りて、屋瓦櫛比の市街を望見する事を期したる余は、只茫然として事務長の顔を打守るのみ。

暫らくして余はまた問を發しぬ、何れの處より上陸するやと、事務長またかの砂丘を指さして曰く、その砂山の前にして旅客は海岸より六七町の砂原を徒歩せざれば俾ある處に達せずと、余いよ／＼呆然として自失するのみ、五港の一として天下に著名なる新潟港は只海邊の砂原に過ぎざるか、と余は自ら問ふて容易に事務長の言を信ずる事能はざりしなりき。

されど新潟市に上陸するまでに余は新潟港なるものを知り得たり、而して余は諸君に新潟港を紹介するの榮を得たるを喜ぶ。

朝の食事の時劈頭余は船長に問ふて曰く、新潟港は如何なる港ぞと

船長の答は頗る簡なりき、曰く大洋の中に浮標を浮べたるが如き港なりと、乃ち簡なりと雖も寸鐵殺人的なり、人をして最も速やかに新潟港を了解せしむる、この一語の如きあらんや。

若し新潟港を港といふべくんば、海岸線の走る處皆之を港と稱し得べし、蓋し港として最主要なるは、風濤を凌ぐべき天然若くは人為の設備を有し、且海底安全にして善く船を出入せしめ得るにあり、然れども新潟港に至つては全く此等の要點を缺く、日本海の吹曝しに面して、有名なる波濤の荒き處なるに、少しも風濤を遮ぎるべき防障なく、海は信濃川より流出する土砂の爲に埋められ且絶えずその底を變じ、船を岸に近づくる事能はず、即ち實際において船長の警語の如く、新潟港に碇泊するは恰かも太平洋中に碇泊するが如し、少しく風立つ時は船全く新潟に寄港する事能はず、寄港せるものも

風立てば、直ちに佐渡に逃るゝを常とす、安全に新潟に寄港し得るは日本海の極めて平穩なる夏季土用中のみに限り、その他の場合に於いては、寄港し得る事あるも、船員等はいつにても逃去り得る用意のために相警めて輕々しく上陸せず、『船客で上陸するものは、船では置いて行く積り、客の方でも置去られる積り』なりとは驚ろくべき港ならずや。

新潟港の危険を事實において證據立つゝあるものはその凄まじき救助船なり、普通の場合に解釋する時は、救助船なるものは難破船若くは溺死者を救はんとするにあれども、新潟港の救助船は冬季否冬季ならざるも風浪の高き時に、艇舟の用をなさんがために來るなり此救助船は二重底より成り、豫て必死を極めたる二三十人の屈強なる水夫乗込み、三十餘艇の櫓を操つり、宛がら百足の如く海上を這

來るものにして、心弱き婦女等はこの救助船を見たるのみにて、まづ膽潰るゝとはさもあるべし、然れどもその岸上の光景に至つては更に最も凄まじきものありといふ、乞ふ之を説ん。

(中)

余は救助船の如何なるものなるやを説きたり、婦女子の如きはこの救助船を見たるのみにて戰慄する事をも述たり、諸君今若し新潟に來り、此救助船に乗らざるべからざる運命に遭遇したりと假定せよ諸君は本船より之に乘移るの際において、まづ九死の瀬戸際に立つ事を覺悟せざるべからず、激し來る怒濤のために、素より普通の場合の如く梯子を下す事能はざるが故に、舷側より太き麻繩もて支へたる頑丈なる架棚を釣下し、船員まづ之に乗りて上陸すべき船客を抱き、かの凄まじき救助船に移さんと待構ふるの光景先づ肌粟せ

第一編 (續くべき所)

しむるに足らん、救助船は既に舷側にあれども或時は九天の上に高く、或時は奈落の底に低くして、素より尋常に客を移す能はざるは愚者尙領するに難からざるべし、船員はそも如何にして船客を移さんとするぞ、他なし、船員とて素より神にあらず、只人間としてなし得る最上の策を盡すに過ぎるのみ——そは救助船の高く浮上りて架棚に近づくと目を目がけ、隙さず抱きかへたる船客を投込むなり！然り、船客の救助船に投入らるゝ光景は恰かも貨物の投入らるゝに異ならず、只貨物は無言のまゝ天上より落來れども、此は題目を唱へつゝ落來るの差あるのみ。

諸君斯の如くにして辛くも救助船に乗り得たりと假定せよ、乃ち乗り得たるの故を以て、既に難關を切抜けるたると安心せば、そは大なる誤解なり、第二の難關は更にまた遙かの岸邊に待構へつゝ

ある事を覺悟するを要す。必死を期したる銅張の屈強なる男子等三十餘人がエンヤ、くくと連呼しつゝ、三十餘挺の櫓を操り、山のごとき高波を潜り行く船底に、諸君が仔鼠のごとく固まりて神佛を念じつゝある間に、救助船は次第に岸に近づき行くを感ずるならん、この時乞ふ少しく半身を起して岸上の光景を觀取せよ、數十乃至百を數ふる荒男子等岸に立ちて宛がら南洋若くは亞非利加の蠻人が漂着船を待受るが如くに、救助船を待構へ居るを目撃するならん、而して船のまさに岸に近づかんとする刹那、更にこれ等の男子が救助船目がけ一散に海に飛込む驚ろくべき光景を見るならん、此時若し諸君にして幸ひに上陸地の新瀉なる事を記憶し、喰人鬼の待構へ居る南洋若くは亞非利加にあらざる事を思ひ浮べなば、必らずしも膽を潰すの無用なるを悟



らん、左なり、彼等は諸君を脅かさんとして海に飛込むにあらず、そは近づき来る救助船を、安全に岸に引揚んがためなり、蓋しかくせざれば、救助船が波打際において轉覆の恐あるによる、左なきも救助船は岸に近づかんとして往々轉覆する事あり、その轉覆すると見るや、彼等はまた一散に海に飛込み、客を救ひ、また荷物を拾ひ揚ぐるものにして、さてこそかゝる多人数が岸に待構へ居るなれ。これ等の水夫はすべて伊藤仁太郎なるもの、配下に屬せるものにして、仁太郎はまた實に救助船の船長なり、海岸の砂原に瞥見し得る多くの小舎は、是等の水夫を收容せる處にして呼んで仁太郎小舎といふ、新潟港の安全は實に一匹夫仁太郎に依つて維持せらる、仁太郎はこの故に先年緑綬褒章を拜受せり、かくの如き仁太郎を有せる新潟港は光榮なる哉！

余は端なく仁太郎の事に説及べり、乞ふ再び救助船に歸らしめよ、今救助船は幸ひに顛覆の不幸を免がれ、岸に引揚られたりと假定せん、諸君が跟蹤として船を出る姿の如何に哀れなるよ、されど何處までも犠牲を追はんとする海は、その上り際、間一髪の際において諸君を襲ひ、諸君の半身を濡鼠の如くならしめずば、提ふる行李若くは鞆をしたゝかに洗ひ去るならん、若し諸君の衣服も携帯品も何の汚さるゝ處なくして上陸し得たりと云はゞそは天授にして人間業にあらざる事を神に謝せよ、あゝ斯の如くにして上陸し得べき新潟港は眞に驚ろくべき港にあらざる事なきか、之をしも驚ろくべき港と云はずば、天下何れの處にか驚ろくべき港あらん、余は敢て驚ろくべき港といふ、諸君領せりや。

(下)

蓋し漫に地理書によつて得たる智識より打算する時は、その長七十里、舟楫を通ずる事四五十里、北陸の大沃野を、名にし負ふ千曲に貫流して、八千八水を合せ注ぐと稱せらるゝ信濃川は實に新潟の咽喉たり、何もこの川によつて吞吐し得ざるものなきが如くに信ぜらるれど、實際に至つては然らず、土砂常に流出して深淺一ならず、信濃河口を溯り得るは汽帆船の極めて小なるもののみ、二三百噸以上の船に至つては全く河口に入る事能はず、加ふるに河口は急潮常に風と戦ひ、極めて危険なる處として知られ、こゝに沈没するの帆船毎年其數を知らずといふ、畢竟從來の和船のみ通ひ居たる際には直ちに之を新潟市街の河岸に碇繋するを得たるが故に、陸上の交通と相待つて、北國における良港たりしに相違なしと雖も、その良港も今は只舊夢に過ぎるのみ、七尾あり伏木あるの今日、新潟の

貿易港としての價値はいよゝ下落し來らんとす、今日新潟市にては信濃川流末工事のため多大の費額を抛ちつゝあれども、何人もその無効なるを説かざるものなきは氣の毒なり。  
 只夫れ新潟港は斯の如き驚ろくべき不良の港なるにも拘はらず、猶世界の良港なるが如くに持囃され、小汽帆船の如き、彼等の最も嫌へる風浪の危険を冒してまでも、新潟に寄港する事を最上の喜とし貨物の上下しなき船舶すらなほ且多少の用事を假托にこゝに纜を繋ぐもの多しといふに至つては、新潟の更にまた驚くべき港なるに一驚せん。  
 昔は白樂天歌ふて曰く、大行の路能く車を摧くも若し君が心に比せば是坦途、巫峽の水能く舟を覆すも若し君が心に比せば是安流と、新潟がよく船を覆すの危険を有するに拘はらず、その海員を吸引す

る事恰かも磁鐵の針におけるが如く、海女の歌に誘はるゝ舟夫の如くなるもの、豈この悪潮も寧ろ安流たるを思はしむるものあるに依らざるなきを得んや、然り、最も然り、事實において海女の歌は全くこれ等の海員を吸引せるなり。

越女古へより氷肌雪膚と稱す、新潟は即ちその粹を抜き、秀を鍾めたるの地、高樓水に臨み曲欄緩く廻るの處、楊柳晚風に靡き芙蓉曉日に秀で、紛芳羅綺、聲光繚亂、遊冶郎をして壺中別に天あるを思はしむ、海員を吸引するの力最も大なるは即ち斯の如き別天地に外ならず、情海の波瀾に魂を銷せんとするもの、何ぞ巫峽の水を思はん、これ即ち多大の不利を有せる新潟がよく船の出入を頻繁ならしめて、その聲價を維持する所以なりといふ、曩に仁太郎を有せるの光榮を擔へる新潟港は、こゝにまた海女を有するの光榮を擔へり！

新潟の著名なるは、實に貿易港として著名なるにあらずして、北海の情津として極めて著名なるにあり、新潟が今日の盛を致したるは運輸交通の便利の故にあらずして、その酒樓娼閣の故にあるを知らば、その港の不良なるが故に、新潟の繁榮に必らずしも影響する處なきの不可思議なる眞理を一面に發見し得ん。

八百八婦の名われ之を新潟において始めて聞く、八百八婦は則ち淫を賣るもの、別名なり、蓋し古昔娼妓なきの時枕席に侍するもの多く寡婦なりしよりこの名を得來りしといふ、唄に八千八聲の杜鵑あり、此地に八千八水の千曲川あれば、必らずしもこの名に驚ろかさるゝを要せざれども、往時より斯道を以て有名なりし事は、この語の今に存するにても知るべし。

新潟の生命は實にその八百八婦にあつて存ず、八百八婦なくんば八

千八水ありと雖も新潟の存在する所以は則ち零なり、日本廣しと雖もかくの如き港は恐らく無類ならん、こゝにおいてか余は新潟のま  
すく驚ろくべき港なる事を知る。

(十一) 新潟の瞥見

(上)

余の新潟に来れるは土用の眞盛りに際し、日本海の最も平穩なる折  
とて、幸ひにさしたる波もなく、出帆は翌朝八時なれば、心易く上  
陸するの機会を得たり、尤も夕刻までに歸り來る方得策ならんとの  
注意を船長より受けたるなり。  
余は中山廻漕店より差廻せる解舟によりて、かの砂原に上陸し、六  
七町に亘りて歩行の甚だ困難なる堆砂の上を徒歩し、漸やく駐陣場

に達し、こゝに俾を求めて一先大川前通なる中山店に立寄り、それ  
より同店員の案内によりて市中の見物にと出かけぬ。  
新潟は殆んど六萬に近きの人口を有し、實に北陸の都會にして富  
家また多しと稱せらるゝも、打見たる市街は至つて寂寥を極め、活  
氣なく荷動なく、宛がら休息したる長夜の夢を食ぼるに似たり、全  
國有數の開港場を見んとして來れるものは、まづこの睡眠せる市街  
を見て一驚を喫せざる事能はざるべし、然れども新潟が毫も特有の  
生産物を有せず、その唯一の特産物たり、また大に他に輸出しつゝ、  
あるものは、即ち一解語花に過ぎざるの事實を知るものは、また越佐  
二百萬の民が米を賣り石油を賣り木を賣り金を賣り、一夜忽ち得た  
る處の金を擲ち去るの銷金窩は則ち新潟にして、新潟は單に費消地  
たるに過ぎざるの事實を知るものは、新潟の市街に活氣なく、荷動さ

なく、休息し且つ眠れるに似たるを見て、今更之に驚ろくの恐なるを悟るならん。

たゞ新潟市街の見る目に心地善きは市街の縦横に通せる溝渠の兩側に柳を植ゑたるにあり、従つて之に通ずるの橋多く、古來七十二橋の稱ありしも今は既に百數十を以て數ふ、若し夫れ煙は柳外の橋に横はり、柳は橋上の月に靡くの處、美人勾欄に倚つて望み、紫駟嘶いて落花に入り去るを見れば、宛然これ秦淮の景、楊柳は傷心の樹たり、桃李は斷腸の花たるを解せしむるものあるべしといふ。

古町通りは新潟美人の巢窟にして、劇場あり、教坊あり、待合あり、勸商場あり、新潟にありて最も繁榮を極むる目貫の市街と稱す、新潟の新潟たる所以これによつてもまた解するを得べし、西堀通東堀通共に中央に溝渠を通じその兩側には柳の緑を連ねたれば市街とし

ての體裁は頗る善く、殊に西堀通りには諸官衙等の建物多きを見る本町通りは繁華の處と稱すれども見榮なし、その他の街路はいづれも静まり返り、遊覽者の注目を惹くが如き處なけれども、降雪の際の設備として、何れも軒先を一間あまり突出し、家々相連絡せしめかくて軒下を通行の道路となし置けるは目新らしく、降雨の際などには傘も無用なるべしとさへ思はれぬ、市街の廣きは妙なれども家根に瓦なく、木葉板葺の上に頭大の自然石を臚列せるもの多きは見苦し、北國筋の家屋には總て斯の如きもの多きを見るは、日本海より吹まくる風の強きにもよるべけれど、體裁を害する事大なるとその火事早き所以を三顧して可ならん。

新潟には見るべきの處極めて少なし、止むなくんば白山公園と萬代橋とか、萬代橋は信濃川の長流が滔々海に注ぐの處にあり、長さ實

に四百八十間一の粗末なる木橋にして、何の奇とするに足らずと雖も、見るべきはその入町の長さの有するにあり、かくの如き長橋は恐らく他に見る事能はざるべし、川は名にし負ふ千曲川なり、洋々として奔注するの大觀を見て、半空に横はるの長鏡に對せば、また壯觀たるを失はじ、白山公園は古町通りの南端にあり、池あり、丘あり、松あり、花樹あり、信濃川その後を環流し、遠く野を隔て、山に對す、風光また愛すべきも、惜むべし規模小にして只一の庭園に過ぎざるのみ。

別に日和山なるものあり、船見櫓を設け、眺望の可なるを以て稱するも眼下は即ち遊廓にして、また墓地と相隣る、對照の妙は即ち存するも、人をして不快を覺えしむるを奈何、また登臨の場にあらざるなり。

(中)

余は新潟の市街を一巡せる後、一先中山方に歸着しぬ、風呂の湧きたりと云へるに、一浴して汗を落せる心地いふばかりなし、こゝに余はまた遊覽者のために目新らしきものを目撃しぬ、そは古來越後七不思議の一として知られたる所謂火井これなり。

此國の名所圖繪など繕きたるものは、地中に挿込みたる竹筒の先より火燃え出で、これに三叉に組合したる竹を立て、それより鐵瓶など下たるの圖様を見しならん、これ則ち火井にして畢竟今日の瓦斯に過ず、新潟の地たる處の地中瓦斯を發生し、之に管を通ずれば以て使用に供するを得る事、今も昔も異なることなく、只今は簡單なる竹筒に換ふるに槽または導管を以てせるに至れるの差あるのみ、余の今浴したる中山方の風呂もまたその瓦斯を以て沸せるなり、竈

第一編 (新潟の餘見)

の下然り、焜爐然り、家々の座敷にはまた多くその瓦斯管を取付たる體裁善き火鉢の備付あり、只螺子を廻して燐火を點するの勞を取れば、盛んに燃えて忽ち鐵瓶の湯を沸騰せしむ、獨り燃燒の料としてのみならず、夜間の燈明として自由自在に使用せらる、頗る便利にしてまた甚だ愉快なるを覺ゆ、新潟人は不思議の天惠を有せるものかな、但所謂火井を有せるだけそれだけ、眞成の井水は甚だ不良なり、天二物に幸ひせずと謂ふべし。

回漕店の樓上に暫らく休息せる中に、船長と事務長と機關長と俵を連ねて來れり、そは例の新潟名物の風立ち來りて、こゝより積込むべき米の荷役をなす事能はず、止むなく明朝に延し出帆を午後に延期したれば、心安く上陸し來れるなりといふ、余もまた更に新潟を研究し得るの機會を得たるを喜び、暫らく團樂して新潟談に時を移

せる後、また店員に導びかれ、船長等と共に、俵を東堀通なる鍋茶屋に驅りぬ、こゝにて晩饗を取りつゝ、余は端なく、所謂新潟の生命の片影をも窺ひ得たり。

新潟における酒樓の最も有名なるもの、一を行形亭と云ひ、一を鍋茶屋となし、行形亭はその庭を以て勝るといふ、鍋茶屋はその建築頗る宏壯にして、慥かに地方人を驚ろかしむるに足る、その他二會と云ひ三會といひ、或は水明、或は鳥國、或は瓢亭、共に何れも酒樓の大なるものとして、その瀟洒風流を以て知られ、別にまた待合茶屋の古町若くは西堀に軒を接するあり、蕩心撥情の機關は即ち一として備はらざる處なしといふ、新潟の新潟たる所以は實に茲にあつて存す。

美人系こゝより起ると稱せらるゝ新潟の地は、寔に美人に富むが如

し、由來美人を有する事を誇とせる新潟人は、その習俗として男を生む事を喜ばずして女を生む事を希ふ、嘗て落語家に聞く「越後ては男が生れると、これでもか〜と云つて床へ投付け、それでも死なぬ時には角兵衛獅子に賣飛す、それで角兵衛獅子の骨は和らかに出来て居ます」と一場の戯話また幾分の眞を含む、蓋し角兵衛獅子を出し、米搗を出す事は古國名物としては即ち著名なれども、左團扇の安樂を得る所以とは自から相反けり、越後女の極めて持離さるる現世において、滔々として女を重んずるの風を養ひなせるは、當然の現象といふべし、美人ます〜重んぜられて、風俗ますます〜頽廢し來る、多望なるものはそれ唯新潟の前途か。

(下)

只それ人美なる事花の如きも、その語るを聞けば則ち眉を擧しむ、

所謂鶯喉の宛囀たるにあらずして、鳩舌の嘈々たるもの、言葉遣ひも至つて粗野にして方言多く、通譯を得ざれば往々解せざること多し。

銅茶屋の樓上に謠ふものあり――

「新潟名所はさまざまあれど、四方を見渡す日和山、沖の洲崎に出船入船、下町女郎衆に島小供二三小意氣で五六全盛、阪内小路の賑やかさ、寺町二の町通ればこれもし、馬鹿らし、あんにやそん、寄りなれや」

「越後新潟の色町名所、二三に五六に阪内小路、下町に島、脱奔小路、古町言葉で呼まする、お前そん寄りなれや、お客そんがおつ、け來なれるわ、なんてがんだろ、大嫌ひだわ、おうわらちよつくり寄りなれや、せつないわ、やだわね、なんしなれる、止めな



れや、あんまりわるいどもよろしうたまげて居るわ、困つたがんだがね」  
 試みに後者について人の之を解釋するを聞く、色町名所として擧たる二三に五六とは、古來新潟の粹を蒐めたりと稱する古町の小區劃、二の町三の町と五の町六の町とを稱するもの、前者の二三小意氣て五六全盛もまた之を指さす、下町は尤も港口に接近せる一廓、又の名を熊谷小路と呼び、島とは毘沙門島、脱奔小路はこれまた古來着名の一廓、碓を投込む水音に擬して名けたるなりといふ、所謂新潟生粹なる古町言葉にて呼ぶを聞かずや、誰さんといふを誰そんといふはなべて新潟の訛言なり、獨り古町に止まれるにあらず、あねそんは姉さん、あんにやそんは兄さん、お前そん、お客そん、八兵衛そん、空右衛門そん、皆同じ、寄なれや、遊びなれやは所謂小供衆

が日常客を呼ぶの常套語、なんしなれる、かうしなれると一般、やだわぬは厭だわね、なんてがんだろは何てことだろ、困つたがんだがねと同一筆法に出づ、新潟の女は頻りにこのがんだろを振廻す、そつちのがん、こつちのがん、あんがい、こんがい等蓋し皆出所を同うして尤も廣く使用せらるゝもの、あうわらちよつくりのあうわらはこれまた屢々聞く處なり、但し婦女子の口より、直ちに之を聞く時は、その抑揚によりて、忽ち之を解するを得れども、文字に移して記せるを見たるのみにては、解し得るもの恐らく無からん、あうわらは即ち一の感投詞にして略してまた短かくあうわらと發音す、最も強く表はす時にあうわらとなる、解に曰く、あゝら！、あら、まアさうですかと、始めて合點一笑する人ありや否や。  
 さて新潟方言を最も巧みに臚列したりと思はるゝものは、此地の

國文家と聞えし田中なにかしが戯文もて記したる朝市の記事なり、余は朝市をも併せ見たるが故に次に之を掲げん。

(十二) 朝市と草花市

『いなめのはや明なんとするころより朝毎に立つ市は……野山のもの海河のものを市人のものがじ、肩に荷ひ背におひもて来て、道もせきまで押並べ、皆聲々におほやす、まけたくと呼立るは賑はしくも又喧し、野山のものに名だゝるは寄居の蕪、津島屋大根、青山葱、大郷茄子、名目所ずんばい、河渡西瓜、あるは瀬戸の鴨瓜、くねひの鈍豆……海川のものには鯛、鯉、すつぺら、すけと鱈、金頭、しゝむぼう、たらば蟹……これを商ふ人金頭をかゝげて片肌ぬぎ肩を怒らせ金切聲を立て、もしくおとうとお

とうと、馬鹿うまうて馬鹿ぶつとて馬鹿やすいと枕詞に馬鹿を被せて冠り振りく呼立るはその群の僻なるにや……夕顔笊を重げに荷ひ、ハイごめんくと群立つ人を押分通る男あれば、おッこの、このふと、ふんとに支かへてたまげさせらるたと打かこつ乙女もあり……女同士の行逢ながら、あわら、足たえ町のあばそんだけだ、あれとんが、をんとまで、そんま見忘れるてんが、お前そんてんが、かたねはや、來なんねてんが、兄にやそんも姉そんも達者だかねと言懸られて、あ、だいきやいたわ、阪内小路のおか、だねい、ついころくと御不沙汰しました、おッこの、でんがいて、轉ぼうとしたわと、言譯がてらころく、いふも可笑し、鹽卒聲を振絞らして、鯡の昆布巻いりませんかいねいと賣歩く、媼の聲いと哀れ氣に聞ゆ、とうが南瓜の列並たるをあちこち見比

べ、先のがんにせうか、後のがんにせうか、いつち甘そげながんは、どんがんだらう、そっちのがん見せやえんし、おや賣れたがんだがねと面無げに佇む女房もあり、洗芋箆をふりかたげ、こつばかすの無いがね、そつばか負たつて、どつばかの違ひが有るばえんと價をこぎれば、こんがいこつたま有るがね、あんがい事いふて、そんがい一杯負よんだら、どんがい爺さに叱られるやら知れぬ、えゝわんし、負る事えんしと、あんがい、こんがいを數多つけそへて商ふも愛嬌あり……』

右は即ち田中なにかしが朝市の記事なり、この朝市は毎朝本町通の一部に開かるゝものにして、余も翌朝幸ひに名物の朝市を見物し得たり、近郷のものが所謂野山のもの海川のものを荷ひ來り、兩側に並べて客を呼ぶ聲の喧ましき、随分分らぬ詞も多く喧々囂々たる様

右の戯文に記せる如し、左れど新潟地方の方言も交通の便開くるにつれ、次第に減少し、今日にては昔日の如く甚しからずとなり、余は要もせぬに瓜の値を問ひ、川魚の出所を尋ぬるなど彼等と談話を試みたれども、解する能はざるが如き事なかりき、たゞ彼等同志の談話の少しく了解に苦しむのみ。

朝市に次で草花市も新潟の呼物なり、こは毎夜最繁華なる古町通りに開かれ、頗る雑鬧を極むるものと聞けども、余は之を目撃するの機會なかりき、元來日本海の沿岸において盛んに花卉を培養せる處は新潟にして、寄航の旅客船が船内を裝飾するために買入るゝ花卉盆栽の唯一の供給所は實にこの新潟なりとす、果して然らば新潟の産する所獨り解語の花のみに止まらざるなり、されど同じくこれ花にして、一は他に壓せられて聞えず、牡丹芍薬の美は遂に美人に及

ばざる事遠きか。

(十三) 津軽海峡

八日午前十一時本船に乗込む、荷役の後れしたため、午後三時半に至りて漸やく新潟を出帆す、朝来小雨ありしが、午後よりは愈本降となり來れり。

雨の船中は極めて不愉快なり、甲板の上は横しぶきのために佇むべくもあらず、碁も知らず將碁も知らざる余は、詮方なさに獨りサロンの隅に小さくなりて書を讀む。

夜十時寢に就く、雨脚舷側を打つことますます急なり。

翌朝元氣なく身を起して、窓より窺き見れば、思ひきや朝日は照々として海面を照せり、船中の嬉しさは雨と定めたる日の、思ひがけ

ず晴渡れる事なり。

朝食を終りて甲板に出づ、船は今八郎潟あたりの沖をや過るらん左に茫々たる日本海を見て、右に霞る空に紫翠を曳る羽後の連山を望む。

空晴れたる時は海色暗澹の色を減じて一しほ沓を來り、目に心地よき紺碧の色殊に深く、玲瓏として心の底まで透徹し來るかと思はれ空色には多少の紫を交へて瑠璃の如く上一碧、空と海と直に人の心を洗滌し去りて、清爽快潤の感を與へずんば止まず、かゝる時甲板の上に立ち、徘徊し、座し、横はるの心地、王侯もまた何かあらん。

午前十一時半船その船首を轉じて津軽海峡に向ふ、遙かに朝鮮海峡より流れ來る日本海の一潮流、洋々として津軽海峡に向つて流れ、

直ちに渡島の白神岬を衝き、折れて東の方太平洋に潮せんとするもの、惠山岬及大間が崎の中間を掠め、太平洋の北より霧地に海峡に向つて吹來る東風と相激し、日本海の潮流と太平洋の疾風とは端なくこゝに闘かひを開き、潮流の通過する處波悉く逆立ち、潮流の無き處と區劃判然として自らその路を示すを見る、船は則ち潮流の一端に乗じて進むもの、急駛矢の如く、面を拂つて吹き來る風、やゝもすればわれを甲板の上へ吹倒さんとす、試みに船尾に立つて唾すれば、飛んで遙かに一二町の彼方に落つ、また何等の壯觀も忽ち一尾の黒く大なる魚あり、右舷二町の彼方に躍る事二回、再びその姿を没し、三たびその頭を抜ると見る間に、續いて躍り且つ頭背を表はし、尾して進むもの十數尾、列をなして船と併行し、進む事數分間にして遂に姿を没し去る、蓋し海豚の一隊なり、此邊所謂

千匹海豚多く往々舷側に群れ來りて、船と競走する事ありといふ。海豚の没し去れる邊に當りて、陸奥の龍飛崎を望む、龍飛崎より權現崎へかけ、連山の起伏せる處遙かに群を抜る岩木山あり、形眞に富士の如く、津輕富士の名の果して空しからざるを知る、某富士の名を有せる山、諸國に頗る多けれども、何れも形正しからざるもの八面玲瓏たる津輕富士の如きは無けむ。船首より左舷に當りては即ち北海道の山を目睫の間に見る、大島小島は煙波の中にあり、北海の風光自ら人意を壯ならしむるものあり。午後三時船臥半山の後背より轉じて巴灣に入る、巴灣は即ち函館のある所なり。

(十四) 函館港

(上)

樺太山系の北海道を横断するもの、その南端渡島に至りて東西に分岐し、東に亘るものは海岸に走りて恵山岬となり、遙かに陸奥の尻矢崎と相對して津輕海峡の東關門をなし、西に走るものは白神崎をなして龍飛崎と相望み津輕海峡の西關門をなす、一脈別に白神と恵山の中間より分るゝものあり、斜めに海中に斗出し、巴狀をなして内に灣を抱くもの之を函館山となす、巴狀の灣内にあるもの即ち函館港なり。

函館はかくの如くにして函館山に包擁せらるゝが故に四時風浪の憂なく、加ふるに灣内深くして、五港中最良の港と稱せらるゝ、管に貿易港として著名なるのみならず、又實に北門の鎖鑰にして日本海の咽喉たり、函館の重きをなす所以知るべし。

函館山はその形によりて、また臥牛山と稱す、山は總て要塞地帯にして上に砲臺あり、船の函館に來るや、その咫尺の地に接するも、臥牛山によりて包擁せらるゝが故に、只山の後背を見て全くその市街を目撃する事能はず、船漸やく臥牛山の一角を轉じ巴狀の灣内に入るに及んで始めてその市街を見る、かくの如くにして眼に入來る函館市街の大觀は實に人意を強ふせしむるものあり。

市街は海岸より臥牛山の山腹に向つて打建てられ隨つてその大部分は山上に向つて傾斜を有し、その傾斜面に大厦高樓の築かれたるもの層々鱗次せるが故に、頗る美觀を呈し、邦人をして多少の誇を感じせしむるに足る、北海の關門としてかくの如き要塞、かくの如き市街を有する吾人は、安んじて枕を高ふし得るにあらざるなきか。

函館は人口凡そ九萬、市街としての設備に至てはその遺憾なきを見

る、馬車鐵道ありて市街の要衝に通じ、また人力車を煩はすの要なく、電燈會社ありて全港に供給し、電話の設備ある事又いふまでもなし、水道ありてその水質純良に、且供給の豊富なる、無制限にその使用に任じて顧みず、余の來り見たるの時の如き、家々何れもホースを引き水道の良水を幅廣き大道に撒布しつゝあるを見る、此點においては大阪市民たるもの羨やまざらんとするも得んや、函館船渠會社あり、由來我邦東北地方には一の船渠を有せず、航海者の最も不便とせし處なりしに去三十一年この地に船渠の創設を見し以來航海者のために便を興へし事少ならず、然るに今日は更に又改修工事に着手しつゝありて僅に一萬噸以上の船舶を出入せしむるの計畫なりと云へば、竣成の上は東洋有数の船渠たるを得べしといふ、これまた人意を壯ならしむるに足る、加ふるに小樽と此地とを聯結

せる函館鐵道の成功せんとするあり、其悉く相通ずるに至らば函館の盛を加ふると極めて大なるものあるや云までもなく、函館港の前途實にまた多望なりと謂べし。

わが交通丸は午後三時に入港したるも檢疫のために手間取り、四時半余は漸やく旅装を整へて他の同船の學生二人と共に上陸しぬ、余等は函館より別に郵船會社の船に搭じて室蘭に航し、室蘭より炭礦鐵道によりて札幌に赴むき、札幌より小樽に出で、かくて小樽において、そこに入港し居る筈なる交通丸に會せんとせるなり、左れば充分に函館を観察するの暇無きは遺憾なれども、室蘭行汽船の出帆は午後九時なればなほ市中を駆廻る位の餘裕はあらんと、まづ山縣回酒店に赴むき、同店員の案内にて市内目貫の場所を一覽しぬ。

(下)

函館に於て最も繁華なる市街を末廣町、地藏町、臺町、壽恵比町等とす、巨商大賈は多く此邊に住し、道幅も廣く、屋並も整ひ、流石に五港の隨一たる面目を保てり、別に新藏前なる一區劃あり、淺草公園の如く、また小千日前の如く、劇場あり、興行ものあり、矢場あり、玉ころがしあり、飲食店あり、名物嬢の巢窟あり、夏秋の候において最も繁昌を極むといふ。

蓬萊町と臺町とは遊廓あり、一を東廓と稱し他を西廓と稱す、元來函館は夏季に於て外國軍艦の避暑地たる觀あり、彼等の來るや、敵と目ざす本能寺は即ちこの二廓にして、外國軍艦は實に函館を寤す一大財源なりとして歓迎せらる、従つてこの二廓の如き碧眼兒の意を迎ふるに巧みなる、意想外に出るものありといふ。

市街の東南に函館公園あり、西に臥牛山を負ひ北巴灣に面し、直ち

に函館全市を眼下に見る、園の一角摺鉢山に登臨せんか、灣内の軍艦商船は宛然たる箱庭の景物にして、突兀たる駒ヶ嶽は灣を隔て、目睫の間に峙ち、五稜廓は指願の中に入り來る、右は即ち函館港の側面より渺々たる津輕海峽に面し、陸奥の青岱を模糊の間に望む、園内に碑あり、故黒田伯の題辭を刻して海山奇勝といふ、海山奇勝の文字乃ち人を欺むかざるを知るべし、園は甚だ大ならざれども高低一ならず、松櫻等の樹木鬱蒼としてその間を點綴せるが故にまた趣致なしとせず、運動場あり、水産陳列場あり、公園としての面目略備はる、但し園の尤も見るべきは五月の候梅櫻一時に開くの際なりといふ。

公園の下に閑雅なる低地あり、名づけて谷地頭と稱す、函館の大使入幡宮もこゝにあり、戌辰の役に斃れたる幕臣の碧血碑もこゝにあ



り、紳士の別荘あり、割烹店あり、温泉あり、函館の人この地を以て東京の根岸に比す。函館を去る二里の地に湯の川温泉あり、鐵道馬車の便によつて赴むべく、旅館と酒樓とを兼ねるもの數軒あり、函館人の保養所と稱せられ、避暑の外客もまた喜び遊ぶ處、四時浴客を絶ずといふ。有名なる五稜廓は函館を去る東北二十五町の地にあり、これもまた鐵道馬車に依つて赴くべし、安政年間函館奉行の築く處、周圍繞らすに濠を以てし、恰かも城廓の形をなす、かの函館龍紋氷は冬季此濠中より鋸り出すものなりといふ、湯の川温泉と五稜廓と、余は共に觀光の暇なかりしを憾とす、夜八時室蘭に赴くべく、郵船會社の定期航海船陸奥丸に乗込む、甲板の上より函館の夜景を見渡したる光景は最も妙なり、市街は多く山腹の傾斜面に鱗次せるが故に、燈

光もまた自づから段をなし、燦爛として星の如く連なり、まさに天上の星と連接せんとして、星光燈影別にまた静かなる海面にその光を投ぐ、寂寥の氣人に迫り、冷涼真に身に沁むを覺えしむ。

(十五) 室蘭港

十日午前五時前、汽笛の音に夢を破られて目を開けば、船は既に膽振の室蘭港にあり、直ちに衣服を改め、珈琲を啜つて甲板に出れば通ひ船も早や來り居れり、日未だ上らず、爽氣肌を掠め、多少の水蒸氣海面を籠めて、島影山腰淡き事夢に似たり、北海の曉色涼、秋の如く、衣の單なるに堪へざらんとす。室蘭は北海道の東海岸における要港にして、繪鞆半島の腰にあり、半島の岬端巴の如く彎曲して、内に室蘭灣を抱くが故に、北東南の

三面は陸地に擁繞せられ、西の一面はまた内海に向ひ従つて四時風濤の險を知らず、實に函館小樽に次ぐの要港にして、此故にまた海軍鎮守府の豫定地たり。

若夫室蘭の形勝を云んか、北には輪西山ありて、一帯の山系延いて繪鞆半島をなし、岬端早蕨の如く屈曲して一灣を擁する處、灣口に大黒島あり、全島奇岩より成り、綠樹その上に蔚生して、一段の風致を加へ、左右には時雨月見の兩岬磊塊として斗出し、宛かも一幅の畫圖をなす、獨り雨に宜しく月に宜しきみにあらざるなり、半島の南端また別に黝黒なる鯨岩あり、アイヌは之をフンベシユマと呼び、形の鯨に似たるを以て名づけられたるなり、傳へて云ふ、往古此地に大飢饉ありたるの際土人繪鞆に來り食を求めんとして、偶海上死鯨の横はるを認む、乃ち雀躍して薪水の用意をなしその漂着

を待つ事數日なるも、死鯨は遂に漂着し來らず、その始めて岩石なるを知れるの時は即ち彼等が餓死せるの時なりきと、蓋し岩の形の奇なるに依つて生れ出でたるの口碑に過ぎるべしと雖も、鯨岩の如何に鯨に似たるかを説明するには則ち餘あり。

かくの如き島と岩とを有せる室蘭港の風光は決して凡景にあらざる事を知るに足らん、然らば則ちこの好風光を有せる室蘭市街の光景は如何。

室蘭はその始めにおいて僅かに多少のアイヌが住せし一小漁村に過ぎず、この地を開きたるは實に明治五年なりとす、されば室蘭港は建設以來三十年を閲したるに過ぎず、然れども今日にては戸數千百餘に上り、人口既に四千を過ぐ、而も新築家屋の續々として打建られつゝあるを見て、室蘭の前途また甚だ多望なる事を認めずんばあら

ず、蓋し室蘭が今日の盛を致し、また將來繁榮の基礎たるべきもの  
 一に炭礦鐵道の起點たるにあり、無盡藏と稱せらるゝ北海の石炭は  
 重に皆室蘭より輸出せらるゝものにして、殊に外國船の積み出す石  
 炭は頗る巨額に上り、従つて外國船の出入するもの尠なからず、而  
 してその尤も多く出入するものは英國船なりといふ。  
 余は同行の學生と共に丸一旅館に投じ、一先室蘭市街を巡視し、背  
 後の丘上に奉祀せる八幡社に登りて風光を賞せる後、旅館に歸り、  
 朝飯を認め、直ちにまた停車場に向ひぬ、七時十分發の炭礦鐵道列  
 車に投じ、札幌に向はんがためなり。

(十六) 北海道の野色

(上)

余等に乗せて室蘭を發せる列車は海岸線に沿ふて走る事四十哩、更  
 に折れて内地に向ひ、夕張原野を貫きまた石狩原野を横斷して、そ  
 の西端なる札幌に出んとせるなり。  
 乞ふ次第に展開し來る北海道の郊野を見よ。  
 室蘭より二哩を隔てたる最初の停車場輪西を發する比より、風光は  
 徐々に變化し來りて、次第に内地と同じからず、線路の一方は海岸  
 線に沿ふといふも、東海道線若しくは山陽線の如く、爾く海岸に近接  
 せるにあらず、太平洋を望見し得る處は甚だ少なくして、列車は殆ん  
 ど空漠たる原野の間を走するなり。  
 北海道の野は今夏秋の花を以て、美はしく飾られたるを見ずや、輪  
 西より鶯別、幌別等に至るの間は、紫紅色に咲出たる菖蒲丈高く叢  
 生して、宛がら彩どれる地圖の如く、野の彼方此方を傾し、その範

圃の外には大いなる款冬のわれは顔に蔓びこれるあり、丈なす紫蕨の手を伸せるあり、大葉川芎の白き傘形花を着けて、他の淡紅色の傘形花と交はり、菖蒲と拮抗して、高く廣く野の一方を領せるありこれ等の丈高き野草の間に伍して劣らじと争ふ虎尾草の、尺に餘れる紫の穂を抽んずるあり、その細くなよくとせる風姿をもて詩人の憐を買へる女郎花さへ、何事ぞ、こゝには太く逞ましく六尺豊に延出て、虎尾草の穂先に挑めるなり、他を習ふ水引草の、これもまた三尺に餘る紅の花を抽きて、女郎花の腰に纏はんとす、若し歌人をして北海道の秋草を見せしめば、恐らくは啞然として筆を抛たん、露重げなる風情を愛づくべく教へられたる秋草の、こゝには雨をも厭はず、風にも恐れぬ逞しさを示すならずや。されど流石に優しきは撫子なり、草次第に低く、丈高き怪草のどよ

み競はぬ閑寂の芝生のあたり、嬋々として可憐の姿を抜き、蝶を呼び蜂を招きて、右に左に點頭す、時に又黄百合のその間に伍せるあり、深夜の星の如く點々として彼方此方に揺ぐ。撫子の淡紅を見る處また蒲公英の黄を見る、最も美しくしてまた最も濃艶なるは、深紫の花を並べ懸たる烏兜の會交り咲るなり、アイヌはその根を碎きて矢に塗る、この根一分の微よく人を斃すに足るといふ、根に毒あるもの何ぞ花の美なる、その他小櫻草の密集せる如き紫藍色の聚傘花あり、淡紫の花を垂れたる可憐の釣鐘草あり黄紅白紫の名も知れぬ花を着けたるさまくの草あり、一年中において最も美装されたる北海道の野は、かくの如くにして汽車の進行につれわれ等の前に展開し來る、夏季における北海道の野花は實に内地において見るべからざるの偉觀なり、然り、丈の甚だ高き事に

おいて、種類の頗る多き事において、秋草の同時に咲誇る事において、然れども北海道の野における野草の大を知らんとせば、更に深く他の十勝原野釧路原野等に赴むと視るを要す、此等の原野にあつては野生の欵冬、蕨、蓬、牛房、獨活、三葉、芹、葵、木賊等數里の野に瀟々としてその涯際を知らず、丈は低きも四五尺より高きは一丈餘に及び、馬に騎するも尙往々頭を没するといふ、こゝに至つては内地にあるもの、豫想し得る光景にあらざるなり。

(中)

北海道における野の花の美は既に之を見たり、かくの如き緑亂の花をその裝飾とせるの野が、その自然において占る處の風光は如何。室蘭より苫小枝に至る四十哩の沿線は、左方一帶に、これ等の靚装

せる野を前景として、その背景には、所謂蝦夷富士の稱ある休火山後方羊蹄、及び支笏嶽の山系の、連亘起伏せるを見るべく、その支脈の甚だ近く、蜿蜒せるものに至つては、斧斤未だ嘗て入らざるの密林、翁蔚として全山を包むを見るべし、これ等の山系に属せるもの、外、別に傾斜の緩やかなる幾丘陵の、波浪の如く起伏せるありかくの如き丘陵の上には、内地の荒野に見るが如き、矮樹蔓草の葛藤せるを見ずして、只寝善げに見ゆる牧草の、一面に萎々たるを見る、更にこの平滑の丘陵に、多大の風致を添ふるがために、或は二三の老潤葉樹の、帝王の如くその頂きに立ちて、枝を擴ぐるあり、或はその腰に、若くは裾に、鬱蒼たる樹林帯の形づくらるゝあり、加之間々沿海に注ぐの細流ありて、時に潺湲として丘を繞り、また野を縈ふ、若しそれの邊に放養せる牛馬の、悠々としてかの丘

第一編 (北海道の野色)

陵に食み、この細流に飲むの光景に至つては、宛然たる水彩畫中のもの、無聲の詩獨りよく之を説明すべし。  
 登別を出れば、列車は紅紫絢爛の野花に離れて、暫らく緑蒼々の森林中を駛す、樹木は榆、榿、白楊、丹楊、樺、桂、菩提樹等の潤葉樹を多しとし、毫も松杉、檜等を交へず、内地に産するものとは、殆んど皆異種類に屬して、その葉を異にし、その幹を異にし、その樹容を異にせるが故に、余等關西にあるもの、平生目撃する處の樹木とは、その模倣全く同じからず、四圍の光景の相違せると相待つて、殆んど身の日本以外の地にあるにあらざるなきやを疑ふ、殊にこれ等の森林には、未だ斧鉞を加へしものなきが故に、見上るばかりの大木の自然に立枯れせるあり、或は根と共に風のために吹倒されてそのまゝ枯朽せるものあり、飛雪千里天際空林に吼ゆる凄絶

壯絶の光景さへ思ひ出されて、何人と雖も、箱庭めきたる内地の風景とは、甚だしき徑庭あるを感ずるならん、然れども絶大の森林帯に至つては、之を天鹽、十勝、釧路等に求めざるべからず、列車の通過せる處において目撃するが如きは、只森林帯の小模型に過ぎるのみ。  
 北海道の風景は實にその規模において大陸的なり、獨り野花の大なるのみにあらざるなり、列車の白老を過ぎ、錦多峰を過ぎ、苦小枚を過ぎ、漸やく折れて内地に向ふや、次第に展開し來る夕張原野、及び石狩原野の大觀は、また實に京阪の天地をのみ見たるもの、豫想し得る處にあらず、次第に山と遠ざかり、丘と遠ざかりて、瀾望一面の平野には、紅紫の花を點じたる野草が、寸土を残さず、尺地を剩さず、普ねく綠色の天鵝絨を敷つめたるが如くに、その面を

蔽ひ、傲然として單獨に立る老樹、または整々として簇立せる森林が、野の彼方此方を占領して、その單調を破り、油繪的の風致を加ふるを見る、何ぞその風景の散漫に失する事甚だしくして、而もそのよく統一を有し、調和を有する事斯の如くなるや。

(下)

午前十時半余等に乗せたる列車は、夕張炭山に向ふべき支線の分岐點なる追分に着し、由仁、清真布等を過ぎて、十二時半空知太の幌内炭山及び幾春別に向ふべき側、支線、及び官線に連絡すべき砂川線の分岐點なる岩見澤に着しぬ。追分を出る頃より列車の兩側には眞紅の房つけたるが如き實を、累累として垂れたる接骨木樹と、黄花及び白花を着けたる灌木の、甚だ夥しく簇生せるを見る、接骨木樹の實は内地において余の嘗て見

ざる處、北海道に來つて始めてこの灌木が完全の發育を遂ぐるを知り得たり。岩見澤は明治十七年鳥取山口等十七縣の士族が移住し來りて形作りたる有名の一農村にして、人口一萬五千を有し、また北海道における重鎮たり。

岩見澤はまた實に十勝原野、釧路原野と共に、北海道における三大原野の一なる石狩原野の中部に位せるが故に、四望涯際なきこの原野の大を見んとするものは、須からく岩見澤に來り見るを要す、然れども此邊の野は岩見澤を中心として、既に耕作されたる處多く、伐採されたるの森林また少なからず、立木のまゝに根部の周圍を傷けて枯死せしめたる樹林、宛がら冬枯の木立の如く立てるは列車中より屢々見る處なり、されば岩見澤附近に至る時は、原野の大は即

ち之を見るも、自然の大觀に至りてはその損せられたるもの、また多しとなさざるべからず、只夫然しながら大陸的光景に至つては石狩原野において寧ろその發揮されたるを認む、耕作地の大農組織なるが如き、内地には見なれぬ木材を組合はして作れる小舎の散點するが如き、その周囲の大いなる光景と相待つて、全然外國的なり、また實に大的陸なり。

余は後更に西比利亞を見るに及んで、北海道の全く西比利亞と酷似せる事を知りぬ、その自然においては、四圍の風光の全く同一調なる事において、傾斜の緩慢なる同一の丘陵を有する事において、同一種の潤葉樹林を有せる事において、同一なる野花の絢爛たる事において、その人爲の點においては耕作地の大農的なる事に於て、同じく木材を組合して作れる同一模型の小舎を有せる事において。

余は當初において、何故に北海道にて目撃する小舎に、西比利亞にあける農家の小舎と同一のものあるかを訝かりしが、後北海道の大農組織は、その始め之を西比利亞に學び、西比利亞の農夫を聘したるものなるが故に、同一の組立になれる小舎の、今日に尙存在する所以を知り得たり、されば此等の點にあける北海道と西比利亞との酷似は、その天然と相待て更に一層切實に兩者の酷似を感ぜしむ、若我突然巨人の手によりて北海道より西比利亞の野に運ばれんか、焉ぞまた西比利亞の、大日本帝國の境土たる事を疑はん、山川草木風土一として異なる處なく、只相分つ處は一帯帯水を隔つるにあるのみ、只その上に横行濶歩せる人類の、他は碧眼紅髯の露國人たるにあるのみ。

列車岩見澤より幌向を過ぎ、江別に到れば本邦最大の巨流にして、



その流域實に九十二里二十八町を有する石狩川を望み得べし、大原野のある處また大長流あるは地理書の教ふる處、石狩原野の中心果して石狩川あり、十勝原野の十勝川、釧路原野の釧路川、天鹽原野の天鹽川、皆斯の如きのみ、かゝる大川巨流によりて潤さるゝ原野の豊饒なるべきは智者を待つて知らざるなり。  
午後二時十分列車は厚別を過ぎ野幌を過ぎ、石狩原野を西に通過し終りて札幌に入る。

(十七) 札幌

室蘭の丸一旅館より教へられたるまゝに、余等は北二條なる旭館と云へるに投宿し、少なき時間になるべく多く見、多く聞んがために直ちに、札幌市街の巡覽にと出かけぬ。

札幌は北海道廳の所在地にして、函館小樽と共に區制の下にあり、人口四萬餘、その風光の類似せると、人情の函館小樽等に比し悠長なるとより、北海道の京都を以て稱せらるゝ、また市街の規模の大なるがために、よく泰西人の一たび此地に来るものをして、本國に歸るの感あらしむとは、札幌人の私かに誇る處なりといふ。  
余を以て之を見るに京都に類せりといふは多くの點においてその首肯すべきを認めずんばあらず、街路の區劃整然たるが如き然り、市街の一端を流るゝ豊平川の水清冽にして加茂川に似たるが如き然り、西方に近く逼れる臨眺、藻巖、蕾、山崎、手稻の連山は、また之を東山一帯及比叡の諸山に比すべく、市街の西端より多少の平野を隔て、これ等の青黛に對するの光景は眞に目も晴る許にして、恰かも岡崎邊の展望に髣髴たるものあり、櫻花に名ある圓山公園を有す

るも偶然の奇縁といふべく、人氣の悠やかなる所あるは、共に商工の都會にあらざるがためならん、詮じ來れば札幌を以て北海道の京都と稱するの、決して偶然ならざるを認むべし、然れども、その市街が直ちに泰西人をして、本國に歸りたるの感を抱かしむるといふに至つては、札幌人たるもの頗る自負に過ぎたりと云はざるべからず。

規模の大なる事は則ちあり、火防線として市區の中央に幅六十間の大道を有せるが如きは日本何れの都市に求むるも無き處、井然たる方一町の區劃を基礎として、その四周に十一間幅の道路を有し眞に基盤の目の如く端正宏濶の市街を形作れるものまた實に札幌の右に出るの處なし、模範的市街として斯の如き都會を有せる事は吾人の大いに誇とするに値すと雖も、官衙及學校等の建築のその街路に相

應しきを見るの外は、普通の家屋の道路の廣きために甚しく見劣せらるゝと、繁華の街衢を除きては大道の中央に多く蔓草の離々たるを見ざるなく、かの札幌の誇たる六十間幅の大道に盡も虫聲の唧々たるを聞くなど、遂に歐米の都市の有得可き事とも思はれず、もし歐米人が札幌に遊びて故國に歸りたるの感ありとなすといふものあらば、それは恐らく市街以外の點にあらん、只市街をのみ見物したる余には首肯し得べき理由を見出す事はざりしなり。

然れども余を以て札幌を冷笑するものとなす勿れ、また札幌に失望せるものとなす勿れ、三十年前の札幌を見たるものは、誰かまた今日の隆盛を夢想するものあらん。

三十餘年前において札幌は實に石狩原野の一部に過ぎりき、茫々たる荆蕪の裡、森々たる密林の下只五六の茅舎あり、僅かにアイヌの

狐兔と共に棲息せしを見しのみ、夏は則ち野草人の頭を没し、冬は則ち飛雪山河を埋め、千里涯際なく、熊蹄を印し、猛鷲枯林に搏ち、悽愴の氣山野を鎖したるの地、一朝開拓使をこゝに置かれてより、榛莽を切り荊棘を夷げ、多少の變遷を経て遂に今日に至る、豈又滄桑の一大變たらざらんや、今や實に北海道の首腦たりまた學藝の淵源たる札幌の地が、爾後本道の開かるゝと共にますます發達すべきは云ふまでもなく、かの大道の草も生存の餘地を残さず、巍然たる建築も次第にその數を増して、こゝに始めて歐米の都市を凌ぐに至らんは、市區の基礎既になれる札幌においては、決して架空の想像にあらざるべし。

(十八) 北海道における喬木の美

(一)

北海道に來りて何人も驚嘆するものは、その森林の美と、之を形作る喬木の美となるべし、森林の美を説くは未だ大森林を踏査せざる余の敢てする處にあらず、然れども喬木の美に至ては到る處の森林原野において目撃せる余の、好んで之を語らんとする所なり。喬木の野に立るは恰かも偉人の世に立るが如し、その下を過るものは必ず之を仰がずんば止まず、旅人然り、詩人然り、豈啻に旅人と詩人の之を仰ぐのみならんや、憩はんとするものも來り、汗をいれんとするものも來り、雨を避んとするものも來り、疲れたるものも來り、渴きたるものも來り、牛馬も來り、鳥も來りて疇を求む、喬木はまた實に野における豫言者の如し、高く塵世の外に超然として黙々として千年の歴史を語るが如くに、また深く人世の歸趣を示す

第一編 (北海道における喬木の美)

會心の人はその神秘を讀みて之と語るべく、野人も無意味に之と親しみてその俗腸を洗ふべし、喬木を仰いで颯爽の氣を感じるは、偉人に對して畏敬の念を生ずると何ぞ異ならん、喬木は實に人を吸引する一の大なる威力を有せりといふべし。

所謂『喬木の美』なるものは幾分の神秘、別言すれば崇高を含むの點にあり、未開の民が往々喬木の大きなるものを祭り、之を汚せば崇ありとなして迷信的崇敬を拂ふもの、また實に喬木美なるもの、神秘を含むに基つかずんばならず、花卉の美に對して生ずるの快感と喬木の美に對して生ずるの快感と、全然相違せるは此點にあり、花に對する時は心を輕浮ならしむるに引かへ、喬木に對する時は意を沈靜ならしむるもまた此點にあり。

余は最も喬木の美を愛す、大和の奈良公園において常に余をして戀

々去る能はざらしむるものは、その八重櫻にもあらず、その紅葉にもあらず、その藤にもあらず、三笠山にもあらず、猿澤池にもあらず、實に千年の古杉所斑に翳鬱たる淺茅原の風趣にあり、余は常に奈良公園の美を以て一に喬木の美にありとなすものなり。

この意味において、余はまた北海道の美を以て、喬木の美にありとなす、之を札幌について云ふもその美は實に喬木の美あるがためなりといふに躊躇せず、三十年前札幌開拓の當時に幸ひに斧鉞を免れたる喬木の到る處に散在せるは、實に札幌の美觀を維持する所以ならずや、中島遊園地然り、圓山公園然り、博物館然り、借樂園の附近然り、札幌農園然り、何れに行としてか千年會心の友に接せざるは無し。

試みに札幌市街の西端より、眺望の極めて快潤なる平野を横ぎり、

二三十町の彼方に屏障として連なる峰巒の麓、圓山公園を指して進まんか、途中まづ既に幾十株の老榲が、深き裂目を有せる灰褐色の極めて厚き外皮を装ひ、六七十尺の高さに亭々として簇立し、その大波状を描く巨大の鋸齒葉の表裏錯綜せるもの、深緑淺緑相交りて風に挑み、霄漢に颯々の音を起せるの偉觀を見ん、榲の内地に産するもの多く矮小にして喬木をなすものを見ず、僅かに庭木として植らるゝに止まるに、北海道に來つては則ち喬木をなす事斯の如きを見る、誰かまた一驚せざるを得ん、榲は實に北海道において到處之を生じ、また最も有益なる利用材の一として算へらる、一たび北海道を旅行したるものは各所の停車場に榲皮の夥しく積重ねあるを目撃するならん、それは鱈魚鮭魚等に用ゆる漁網を染るがために用ゆるものにして、北海道においては欠く可らざる必需品なりとす、

その材はまた薪炭、製艦材、鐵道枕木等として用ゐられ、その實は豚の食餌に適し、或は晒して佳良の澱粉を製すべしといふ。

(三)

漸やく進んで圓山公園に近づけば、所謂圓山よりその山麓の地一帯に、菩提樹、榆、刺楸、槭、桂、榛、樺等各種の喬木がその偉觀を恣にし居るを目撃せん。

歐洲にありてその樹容の美を以て稱せられ、屢々詩歌の料となり、また最も廣くその名を知らるゝは即ち菩提樹にして、菩提樹の名はまた普ねくわが學生に知らるゝも、菩提樹を以て全く歐洲に生ぜる外國の樹木としてのみ知るもの多くは皆然り、何ぞ知らん菩提樹は北海道到處に産して、荒涼の野獨りその美を擅にしつゝあらんとは、函館よりまづ室蘭に航し、その地の入幡社に賽するものは、社

頭に目馴れぬ一大老樹ありて、その逞ましき幹には褐色の處々剝落せる外皮を纏ひ、その枝には葉面及葉柄に淡褐色の毛茸を密生せる大なる心臟形葉をつけ、八方に枝幹を張りて龍蟠虎踞し、傲然として室蘭灣に俯瞰しつゝ、あるを見るならん、これ則ち菩提樹の好標本なり、かくの如き菩提樹は實にその歐洲の野を裝飾しつゝあるが如くに到る處北海道の野を裝飾しつゝあるなり、たゞ詩人未だ來らず北海道の菩提樹は在住人にすらその名を知られず、徒らに茫然として大なる空間を占領しつゝあるのみ、菩提樹は獨り樹容の美なるのみならず、その材もまた實用に適し、その内皮の纖維は柔靱にして水濕に堪ゆるが故に、之を布に織り、また繩の代用となすべく、五月の候撥箒して開くその聚繖花は薬用として用ゐられ、その花莖を吸ふの蜂は最も佳良の蜂蜜を生ずるを以て知らる。

その樹容を遠望する時は菩提樹に類し、更に高さ事三十尺、翁鬱として甚だ美しくしき木影を形作れるものは、同じく北歐に普ねくして屢々繪畫の料に上る楡なり、楡は必ずしも北海道にのみ産するにあらざるも、内地にあるものにして北海道にあるもの、如く長大をなし、且つかくの如き美なる樹容をなすものは無し、人若し札幌に來りて楡の美を見んとする者は道を圓山公園に取らずして須らく札幌農園に赴くべし、そこには楡の美の遺憾なく繪畫的に發揮されたるを見るならん。

楡に類して多少その葉を異にし、やゝ幹の高さを減ずるものは、おひやうと呼べる喬木なり、その内皮の纖維は極めて強靱なるより、アイヌは之を織りて平生着用する處の衣服となす、所謂アツシの原料是なり。

その幹の魁偉なるを以て、その葉の巨大なるを以て、刺楸はまた確かに旅人の注目を惹くべき木なり、周圍實に丈餘に達せる老幹には粗大にして深刻なる凄まじき裂目を有し、その枝には恰かも金剛纂に似て、一尺餘の葉柄を附けたる巨大の掌狀分裂葉を密生せるが、その葉はまた表面甚だ平滑にして美しくしき深綠色を有し、淡青色を帯べる裏面と紛糾して、カサ／＼と風に揺ぐの風姿、かの老榭と共に北海道に於る一對の怪樹と稱すべし、アイヌはこの怪樹の芽を喜び食ふといふ。

晩秋東京の近郊に出づるものは稻叢をその腹に巻き、瘦せてひよろ／＼と田の畔に骨立せる榭樹を見るならん、斯の如き樹としてのみ榭樹を知るものは、北海道の榭樹を見てまた一驚を喫せざる事能はざるべし、この地の榭樹はよく五六十尺の高さをなし、幹の太さ

七八尺に及びてその外皮に長大の裂目を有し、簇々として肥大の枝を抽んずる様、かの田の畔のひよろ／＼たる姿とは似るべくもあらざるを見る。

(三)

榭、榭等の外に北海道にありて、よく長大をなすものは楊柳科の樹木なり、内地にあつては僅かに六七尺を出ざる猫柳の如きも、北海道に於る處の濕地に於てよく二三十尺の高さをなせるを見る、然れども喬木をなせる野生の柳には内地の柳の如きその葉の細長きものなく、只大葉柳、ばつこ柳、山ならし及白楊の三四種を見のみ、就中白楊は最も長大をなし、高さ實に百尺以上に及び、屹然として青空に冲せるを見る、白楊は中島遊園地においてその巨大のものに接するを得べし。

然れども北海道における喬木の極めて長大をなせるものは桂にしてまた實に潤葉樹中の王たり、桂は和名、玉かつら若くはかつらぎと優美の名に負へるものにして、支那の所謂桂樹に外ならずといふ、されど菩提樹のリンデンたるが如くに、桂のまたローレルたる事を合點する人あらばそは大なる誤なり、歐洲において月桂冠に加ふるの桂即ちローレルは地中海の沿岸に生ぜる矮小の常緑灌木にして芳香ある披針形葉を附くるもの、之は即ち然らず、雲葉科に屬せる樹木の特色として葉縁雲頭状を描き、殆んど全圓をなせる徑一二寸の心臟形葉を附け、小枝は下垂し大枝は直生せる巨大の落葉木なれば、所謂ローレルの桂とは雲泥の差あり、たゞそれ然るにも拘はらず、北海道における桂の美に至つてはわれ實に之を謠ふの才なきを恥づ。

桂の大枝は悉く直生せるが故に、その樹容は菩提樹若くは楡の如くコンモリと四方に繁茂せるものとは全く相違し、北海道にありて他に樹容の之と同じきものを見ず、もし之を内地に求むればかの威風凛々として矗立せる大銀杏之に似たらんか、大幹小幹悉く天空に向つて射出し、その高さものに至つては實に百一二十尺の青霄を摩し堂々として天に朝するの様、眞に英雄馬を吳山の第一峯に立るの概あり、余圓山々下の一桂樹の下に立ち、更に圓山を仰ぎて、鬱蒼たる喬木の間、亭々として遙かに群を抜る幾株の桂を仰ぐに、颯爽の風姿寔に喬木の覇たるを示して勇ましなるといふ許りなし、菩提樹の美、楡の美、白楊の美、各その特色ありと雖も、遂に桂の堂々たるに加かざるを覺ゆ、われは實に桂を以て落葉木中の王と呼ぶに躊躇せざるなり。



聞く膽振國有珠郡長流川の上流にはこの桂のみを以て成れる巨大の  
單純林あり、一たび足をその境に入れんか、恰かも數百世紀の前に  
遡つて太古の森林を蹈むが如きを覺ゆと、その絶大の風光眞に想像  
に餘りあるにあらずや。

もしそれ十一月の候、霜華地に零ちて金風樹上加はらんか、落葉  
軍の先鋒をなし、眞先にその葉を振ひ落せるは桂にして、千葉萬葉  
億萬葉、風一たび加はる毎に、颯々としてその枝頭を離れ、雜然と  
して颯風に渦き散るの光景眞に一場の偉觀たるを失はず、纏てその  
半を振ひ落せる頃は榛次ぎ、樺次ぎ、楡次ぎ、菩提樹次ぎ、刺楸次  
ぎ、槭次ぎ、朴次ぎ、槐次ぎ、榎次ぎ、黄蘗次ぎ、山毛榉次ぎ、楊  
次ぎ、有とあらゆる潤葉樹は悉くその紅黄色に染めたるの葉を用に  
振ひ落し、壯絶に次ぐに悽絶の光景を以てし、人をして應接に遑な

きその大觀に驚ろかしむるといふ、眞に然らん、われは詩人の未だ  
北海道の用を歌へるものなきを恨む。

(四)

秋季に至りて紅葉すべき槭樹科の樹木はまた極めて多し、かの早春  
の候その樹液を取て佳良の砂糖を製すべき槭楓を始め、明月楓、山  
紅葉、苧殼花、花楓、三葉楓、くろび槭等隨處他の喬木の間に伍し  
低さも三四丈高きは六七丈に及び、その葉は皆大にして内地の紅楓  
の如く小ならず、何れも紅葉、若くは黄葉せざるものなく、就中明  
月楓の如きは他の漆樹と共に燃ゆるが如き鮮紅色に變じ、北海道の  
秋郊を飾るの様、目も綾なる許りなりとぞ、くろび槭はまた世界中  
北海道の外には全く産せざる珍種にして、植物學上に頗る知名のも  
のなりといふ。

北海道の山野は獨り秋季においてその美觀を恣にするのみならず、四五月の節においては辛夷の眞白く大いなる花をつけて森林を飾るあり、或時は全山悉く辛夷の花を以て包まれ、宛がら時ならぬ白雪の皚々たるを見る事ありと云ふ、また七月の候に至ればこれも北海道の地隨所に産する朴の枝頭夷辛の花よりも更に大なる淡紫の花を附くるあり、或はまた白雲木の美はしき白花を附けて、その名の如く白雲を梢に搖曳せしむる事あり、或はまた同じ頃に木犀科に屬するはしどいの攢簇せる小花をつけて香風を送るあり、北海道の喬木は實にかくの如くにしてその廣漠たる自然に大いなる趣味を與へ、その單調を破る、北海道に住せるものは坐ながらにしてかゝる自然の天恵に浴し、四時の序内地に比してその變化多き風景に、心目を樂しましめ得べきなり。

されど余の殆んど怪訝に堪へざるは此地に在住せる人の、これ等の極めて美なる喬木に對し全然趣味を有せず、はたその名をだも知らんとせざるの一事なり、余は始めかの室蘭において、その八幡の社頭に最も目立ちて見ゆる老菩提樹を指さし、之を二三の人に尋ねたるに、よく一人の答へ得るものなかりき、その小枝を折り來りて之を旅館のものに示し問ひたるも、彼等もまたその名を云ふ事能はざるなりき、余は更にこの枝を汽車中に携へ行きて、乗客に示したるに結果はまた同一に終りぬ、余はまた列車の森林を過る毎に、一々その木を指さし、之を問ひ試みるも、只知らずとの答を得たるのみ僅かにその一二を云ひ得たるものも方言のまゝを呼べるに過ぎりき余の札幌に來るや、その博物館において、その借樂園附近においてその中島遊園地において、太古の樹木かとも思はるゝばかりの楡、

白楊、桂、刺楸、黄蘗、菩提樹等を指さし、之を車夫に問ひ、傍人に問ひ、茶店の主人に問ひたるも、一人の要領ある答をなし得るものなかりき、中島遊園地の樹間を逍遙しつゝありたる一紳士は余に語りて曰く、自分は北海道に來りて未だ一年に滿たず、樹下の逍遙は最も愛する所なるが故に、常にこれ等の樹の名を知らんとするものなれども、遂にその名を教へ得るものに遭はねば、知らぬまゝにて今日に至れり、只獨りこの樹の刺楸たるを知るのみと、彼は大なる刺楸の下に立ち居たるなり、新開地の人は常に没趣味なるを免れず、然れども札幌の地開けてより三十年、自ら風流を以て京都に比するにあらずや、而も何ぞその自然に對して等閑に過るの甚しき。

(五)

余は北海道における潤葉樹のみを説きて針葉樹に及ばざりき、潤葉

樹は北海道の樹木の大半を占れども、針葉樹もまた實に北海道特有の樹種に富みその美決して潤葉樹の美に譲らざるなり、唯北海道においては内地に産するが如き針葉樹、松、杉、檜、樅等専ら温帯園に屬する喬木を産せず、只その最南部たる函館附近において僅かに多少の杉を見るのみ、但し函館公園、札幌圓山公園等には内地の松を移植せるありて、鬱茂の色を示し居るを見れば、松もまた北海道にありて、必らずしも成長せざるものにあらざるは明らかなり。北海道における松柏科の樹木即ち針葉樹には、あすなろ、棋楠樹、姫小松、五葉松、這松、蝦夷松、檜松、醜丹松等の數種あり、その這松の偃臥せるを除きては、何れも亭々たる喬木にしてその優しき名に呼べる姫小松さへ六七十尺の高さに達し、檜松及び蝦夷松は共に百尺以上に抽んで、直立の大圓錐形をなして最も美觀を極むるとい

ふ、然れども松柏科の樹木は深山幽谷に於いてよくその生長を遂ぐるものにして、札幌附近において見るが如きは何れもその小なるものに過ぎれば、遂に針葉樹林の大觀に接する能はざりしは、余の大いに遺憾とせる所なり。

抑も北海道の森林は全道面積の五十八パーセントを占るほど絶大の區域を領すれども樹木の種類は甚だ多からず、喬木と亞喬木とを合して僅に六十餘種に過ぎず、之を津輕海峡を隔てたる陸羽地方の樹種に比すればその半數にだも滿ざるなり、蓋し陸羽地方と北海道と甚しく其氣候を異にせざるに、斯の如く樹種を減ずるは、一に海峡に遮斷せられて樹種北進の道を失ひたるに依らんといふ。

北海道の樹木は夏季俄かに生長するが故にその材質の粗密一様ならざるの嫌ありて、建築材としては不適當の者なきにあらずと雖も、

樅松、蝦夷松の如きは良好の建築主材として用ゐられ、山毛櫨、刺楸、白楊、桂、黄蘗、楡、槐、胡桃の如きまた尤も有用の材たり、棋楠樹、槐、桑の如きは木理緻密にして頗る美なるを以て床柱及裝飾器具の用材として珍重せらる、然れども北海道の内地に入る時はあたらこれ等の良材も空しく摧かれて薪となり、または徒らに掘立小屋の材料となれるを見る、こゝに至つては北海道の樹木が、獨り詩的に顧みられざるのみならず、實際的に於いてもまた全く忘却されたるなり。

北海道の喬木は廣く之を利用する時は、その木材以外の部分の、諸種の用途に供し得べきもの少なからず、また實際において土人若くは内地人の少數によつて利用せられつゝあるもの頗る多し、かのあひやらの纖維のあつしに織られ、櫛皮の漁網を染るがために用ゐら

る、等を主とし、樺の皮は拔爾撒謨質を含むを以て乾餾して油を得べきのみならず、その樹皮は生のまゝにても降しきる大雨の中に燃ゆる非常の燃焼力を有するが故に附木の代用または松明として用ゐられ、露國人は専らこの油を露西亞皮製造に使用せり、またその樹液は有効なる壞血病豫防薬となる、白雲木の實よりは蠟燭を製すべく、析の實よりは析餅を作り、その樹皮は幾那の代用となすべし、あをだもの木炭はアイヌの婦女が黧をなすに用ゆるもの、この樹の汁は製墨に用ゐるて大いに光澤を増さしむ、山毛櫨の皮は染料に用ゐるその實は食ふべくまた油を製すべし、あすなろの樹皮は火繩及繩を製すべく、棋楠樹の果肉は美味にして食ふべし、黄蘗の内皮は染料たりまた薬用たるに適し、その實は食ふべく、外皮はキルク質にして栓となすべし、アイヌはその足指の腐爛せる時この内皮または實

を碎きて之を塗抹す、辛夷はアイヌその樹皮を茶の代用とし、花を薬用とす、漆樹よりは五倍子を得べく、榛の實もまた好染料たり、山櫻の實よりは酒を醸すべく、榆よりは佳良なる榆茸を得べし、その他アイヌが葉若くは樹皮を薬用に供しつゝあるもの等を擧れば猶十指を屈すべく、また以て北海道の樹木がその木材以外に利用し得べき點多々あるを察して餘りあるべし、要するに此等の喬木は皆に北海道を裝飾せる一大美觀たるのみならず、また實に北海道の一大富源たるものにして、北海道の森林を見ざるものは未だ以て喬木の美を語るべからず、未だ以て森林の富を説くべからざるなり。

(十九) 詩的農園

札幌において最も詩趣に富むの地を求むれば、札幌農園か。

札幌農園は世界の最大農園たるアメリカマサチューセツツ農学校の規模に依りて成れりと稱せらるゝ札幌農學校に附屬せるものにして、實に我邦の模範農園たり、農園としての設備遺憾なきに近きのみならず、地は即ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地において求むべくもあらぬ廣漠の地域を領し、凡百の施設その狹隘を感ずるなく縦横に經營の技能を發揮して餘りあり、農園として斯の如く完全なるは蓋し尠なからん。

然れども余はこゝに農園の設備を説んとするにあらず、余の記さんとする所は唯その風致にあり、然り、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。

西北の二面全く開け、平野遠く連なりて西は札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指して、その涯際を知らず、萋々

たる牧草叢の如きの處、こゝにはかの林中の雜樹の如く、他と相凌ぎ相排せず、廣きスペースを占て處まばらに立てる楡の、晝は残る隈なく日の光を浴び、夜は遺憾なく星の暈を受け、何に遮ぎらるゝものもなきその根は、太古のまゝなる土壌より潤澤なる養分を吸ひ思ふまゝにその特性を發達せしめて、蓊蒼たるその枝葉は百歩の地を蔽ひ、森々たるその幹は百尺の空を摩するを見る、一たび足を農園の牧場に容れたるものは、何人と雖も遺憾なく發揮されたる楡の美に驚嘆すべし。

それ廣漠たる平野の青きは既に人の心を快潤ならしむ、別に處々喬木の亭々たるを配するの時、その趣味乃ち油然として加はる、而もその喬木の種類によつてまた大いに詩趣を増減す、かゝる平野を飾るに最も適せる樹木は、松の如きにあらず、杉の如きにあらず、實

にその高さと共に厚を有し、厚と共にまたその幅を有するもの、分明に云へばその枝葉十重二十重に密生し、コンモリとして晝猶暗き木陰を作るの喬木たらざるべからず、乞ふ、かくの如き喬木の森々として、青緑の平野に立る事を想像せよ、何ぞその繪の如くにしてまた詩の如くなるや、人若し十分にかゝる想像を繞らす事を得たりとせば、其人は即ち遺憾なく札幌農園を其腦に描き得たるなり。農園が楡によつてその詩趣を加ふる事斯の如し、然れどもこれたゞ自然における詩趣のみ、更に此間に牛を點じ馬を點じ羊を點するに至つて、農園の眞詩趣は始めて活躍す。丈高く四肢長く、軀軀驚ろくべきほど巨大にして黒白の斑を有せるホルスタイン種の牛が、一はその大樹の下に横はり一は立てる、或は長方形の軀軀をなせる赤色の短角牛、眼柔しく四肢短かきエイア

シヤア一種の牛等が此處に彼處に草を食る、或は逍遙へる、或は尾を振れる、更に美はしき毛を被むれるメリノ種の羊がその角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光の人馴れて近づき來れるなど悠々自適の様見えて、若し此世に樂園なるものありせば、その關門は實に此の如き處なるべしと思はしむ。その繪畫的なる、その詩的なる、また附近の建物と相待てその外國的なる、少なくともこゝに來るものは、塵世の光景と甚しく相隔たれるを感ずるならん、札幌農園は實に斯の如き特色を有す、余は斯の如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を祝し、併せて札幌農學校より往々文章の士を出せるの偶然ならざるを知り、且つ之を喜ぶものなり。

(二十) 小樽

(上)

十一日午後二時二十分札幌を發して小樽に向ふ、札幌より小樽までは僅かに二十哩計なれば、汽車程一時間半に過ぎず、三時五十分余等は既に小樽停車場にありぬ。

小樽は後志國高島郡にあり、地は忍路に隣り、西は積丹神威岬の嶮ありて、晴昔函館、松前との交通最も險惡を極めし處、所謂北海の名物追分節に「忍路、高島及びもないが……」と歌はしめたるの地なるも、今はその搦手より自由自在に鐵路を通じて、熊伏す野邊も物の敷ならず、海には大船を通はしめて、そのかみ婦人を伴へば海神の崇ありとなし、菊を結び酒を奠して過ぎたる神威岬の險も、た

まゝ船夫が指さし示して舊を語るの料となれるに止まるのみ、かくて小樽は北海道西海岸における重鎮をなし、函館と相待つて全國有数の貿易港とはなれるなり。

小樽は對岸の浦鹽斯徳とその緯度において殆んど同一の地位を占む然れども彼にあつてはオックク海より來る寒潮を受け、冬季間海水堅氷を結びて全く船を通ぜず、陸上の温度の如きも氷點下二十七八度に下る事屢なるに引かへ、これにあつては對馬海峡より北海道の西岸を洗ふて、宗谷海峡に流るゝの暖流あり、小樽地方海岸の海水を緩和し、爲に頗る氣候を溫和ならしめて、冬季におけるも華氏三四十度の平均温度を有し、之をシカゴの冬に比して寒からず、夏季は七十度より八十五六度を往來して巴里の夏よりも暖かなり、殊に北海道特種の現象たる降雨少なく晴天多き事は、小樽にあつて殊に



著しく、また浦鹽斯德及根室の名物にして、極めて不愉快なる夏季の濃霧を見る事なし、小樽の天恵を有せるやまた大なりと云はざるべからず。

かくの如き天恵を有せるの市街が、その大いに發達すべきは何人も怪しまざる處ならん、然れども小樽の發達に至つては頗る人を驚ろかしむるものあり、明治元年において僅かに二千の人口を有したるの小漁業地は、明治二十年に一萬五千人となり、三十年に五萬四千餘人となり、更にこの最近に至つては、最も驚くべき進歩をなし一躍して昨年末に七萬二千の人口を示せり、その商業の如き全國の商港とし云へるものにして、小樽の地に取り引を有せざるものなく、小豆、菜種及び鱈の輸出に至つては全國の第一位を占め、木材鑛物また五十萬圓以上の輸出あり、貨物の集散實に長崎港の七倍に上る

僅に三十年間における斯の如き進歩は門司を除きて他に無き所なりといふ。

小樽の市街はその背後及び左右に山を負ひ、東北の一面開きて小樽灣に臨む、山のために遮ぎられて區域甚だ狭く、而もその膨脹力極めて大なるが故に、海を埋め山を崩して續々市街を形作りつゝあり従つて街衢屈曲多く、高低また一ならず、後志、北見、天鹽の集散地として吞吐せるその貨物の車馬に依りて入り來るもの、これ等の街衢に填充し、右往左往に行違ふ様は、かの市區最も端正にして些の高低なく、幅廣き道路に木あり草あり、長閑にして眠れる如き札幌の市街よりこゝに入來るものをして極めて異様の感を起さしむ。

(下)

余は小樽に着するや、まづ海岸なる大家支店を尋ね、その紹介にて堺町の旅館越中屋に投じぬ、室蘭札幌小樽等の旅店は悉く茶代廢止を實行し、客の来るやまづ等級と價格とを明記せる厚板を持來り、客の好む處に一任せるが故に、茶代のために無用の苦勞をなすに及ばず、且つその設備行届きて遺憾なき等殆んど内地の旅舎に見るべからざる所なり、北海道に來れる客の最も便利を感ぜるは實に此點にあり、新開の地舊弊に泥まず、新智識の入り易き所以なるべし。午後六時小樽新聞社の平野君尋ね來る、相共に市中を散策し、天狗山下の一樓に會食して、小樽談を聞く。

十二日午前八時大家店員來り、手宮の碑及び築港工事に案内せんと云はるゝまゝ、連立つ、手宮なる炭礦鐵道事務所に齋藤君を訪ひ、同君を煩はして、同會社の構内なる斷崖の碑を見、そこを出て、近き

築港工事を見る。

元來小樽灣は南北十五町東西十町に及び、深さ六尋より八尋に達し一時に百餘隻の大船を容るゝに足るべき良灣なれども、少しく洞開に失して、冬季西北風吹すさむ時は波浪高く、碇船に困難なるより築港工事は即ち經營されたるものにして去三十年より二百十七萬圓の工費を支出し、十年計畫を以て起工せるもの、七百間の突隄中既に四百間の工事を了りたれば、今日にても大いに風波を減じ、稍完全の良港をなすに至れるなり。

突隄は高島岬の鼻より斜に一直線に突出されたるものにして、内に小樽灣を抱き、右に小樽市街を望み、市後の青黛は悉く影を灣内に零し、突隄上の風光極めて佳なり、加ふるに隄脚を俯瞰する時は、青く澄み渡れる幾尋の底に、流れ寄りて附着せるまゝ生長せる昆布

の、長きは丈に及べるもの、相紛糾して長蛇の蟠るが如く、波のた  
め右往左往に揺曳せる様、物凄くも目覺しく、北海にあらざれば見  
るべからざるの奇觀なり。  
工事の大きは素より大阪築港に比すべくもあらねど工事の模様は寧ろ  
趣味に富むを覺ゆ、そはこゝにては多數の潜水夫を役使しつゝあれ  
ばなり、ブロックは云ふまでもなく蒸汽器械を以て沈下しつゝある  
ものなれども、潜水夫はその捨石を檢し、はた徐々に沈下し來るブ  
ロツクの下にありて、その位置を檢するがため使役せらるゝなり、  
一時に海底にあるの潜水夫六七名、數艘の小舟を懸して、唧筒もて  
盛んに空氣を送りつゝあれば、紺碧なる海底よりは、排泄せらるゝ  
空氣の眞白き泡をなして、そこ此處に立昇るあり、幾千貫の大沈石  
太き鋼索に釣下られて、刻一刻、始めは無數の泡立てる海面に接吻

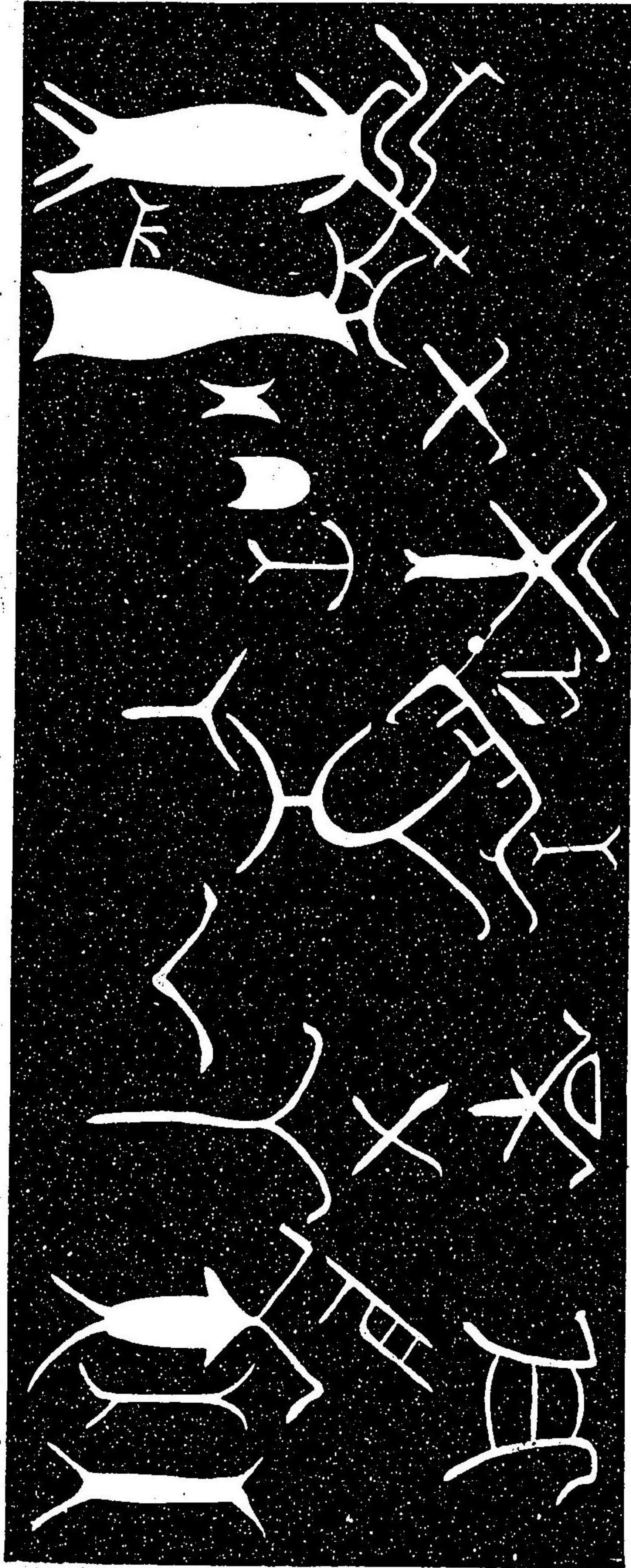
し、やがて分を没し、寸を没し、尺を没し、全體を没し、猶暫くは  
臙ろげに沈み行くその形を認むべきも、四五尋に至りて全く辨すべ  
からず、たゞ沸々としてその邊より泡沫のすさまじく上騰せるを見  
るのみ、既にして潜水夫の一表はれ、二表はれ、之と引かへに用意  
せる潜水夫のまた沈み行もの一二、潜水衣を着つゝあるあり、潜水  
衣を脱せるあり、代りて唧筒の柄を取れるあり、休息せるあり、彼  
等黙々として多く語らず、衣を着るものも無言、衣を脱せるものも  
無言、沈みゆくもの素より無言、恰かも身命を賭せるもの、捨身の  
場に赴むくが如し、その偶然に出たるか潜水夫の生活の彼等を沈鬱  
ならしむるに依るか、その何れなるを知らずと雖も、物凄き沈石の  
光景と相待つて、見るものに一種悽愴の感を覺えしむ、沈石工事を  
見る事四五十分間、偶々平野君の追ひ來るあり、乃ち三人相携へて

小樽公園を見るべく途次また手宮の碑を過る。

(二十一) 断崖の碑と(コロボクウングル)

(上)

所謂手宮の碑は、小樽港の西手宮の懸崖に彫刻されたる奇形の徽號を指せるなり、そはアイヌが北海道に移住せる幾千年の以前に於いて、そこに住へる石器時代の人種、若くは侵入者の手に依つて成れる唯一の遺跡として、考古學上極めて興味ある處のものなり、惜いかな、今より二十餘年前風雨のため岩石崩壊し、其大半を失したるを、地所は今炭鑛鐵道會社の有に歸せるを以て同社にては屋梁を構らへてその保存を謀り、猥に人の入るを許さざるの注意を取れるは喜ぶべし、此書に挿入せる所の圖は、余が町嚀にそを摸寫し來れる



手宮断崖の碑 (原形凡百二十一分一)

を、更に縮寫せしめたもの、凡そ原形の百廿分の一大なれば、又  
 以て原形の頗る大なるものたるを知るべし、而もこゝに掲げたるは  
 その一半に過ぎず、更にその左方に連続して、殆んど同じ長さほど  
 に、異様の徽號の臚列せるを見る、此等の徽號を刻めるの處は斷崖  
 の一面にして殆ど等身の高さであり、形は即ち此の如く奇異にして  
 其何の意味を有せるかは、何人も未だ考へ及ぶるなり。  
 かゝる徽號はアイヌの絶えて用ゐざる所にして、また先史時代  
 よび原史時代の古墳において發見せる徽號、若くは標識の様式と  
 も相違し、實に解くべからざる不可思議の謎たり、或ものは之を文  
 字となし、或ものは之を歌謠となし、或ものは豪族の徽章なりとし  
 或ものは非常の出來事の記録となし、或ものは偉人の墓標となす、  
 その墓標となせるは、嘗て岩石の下より人骨を發見したりとの口碑

第一編 (原形の碑)

に依れるなりといふ。  
之を内地の古墳等に發見せる徽號に比するに、寧ろ外國に近く、且歐洲に於る近世の文存 T H Y X 等に似たるものあるを見るは頗る奇と謂べし。

アイヌの口碑によるに、この碑はコロボクウングルの刻めるものなりと、然らば則ちコロボクウングルとは何ものぞ。

(下)

コロボクウングルとは先史時代(石器時代)の人民——少なくともかゝる時代の人民の一部に外ならず、そもく日本に於る先史時代の人民は如何なる生活の狀態をなしたるありたるか、之を日本國內到處に分布せるの遺蹟に徴するも確證を得ず、只僅かに天孫人種(大和民族)と石器時代の人種との連鎖たるアイヌ人種に問ふて、彼等の間に

傳はる口碑により、その消息を窺ふに過ぎざるのみ、今手宮の碑を刻めりといふコロボクウングルに關するアイヌの口碑に曰く

(一) 我等アイヌがシャモ(天孫人種)のために追はれてこの島に移り住みし時にはアイヌと異なる人間こゝに住ひ居たり、彼等は常に款冬の葉の下に隠れし故コロボクウングル(コロボツクル)の名を下したり、そはコロコニ(款冬)ボク(下)ウ(の)グル(人)と云へるアイヌ語の約言に外ならず、その居處は堅穴にして、今も諸處にその跡存せり、その丈はアイヌに比して甚だ低かりし、土を以て碗を作る事巧みにして屢々アイヌの家に携へ來り、食物と交換し行けり、彼等は窓より手をのみ入れて遺取するを例とし、決して家に入らざりき、或時アイヌ無理にその手を引入れしかば、いたく怒りてその後絶えてアイヌに接近する事なく、追々に此地方を退いて終

には悉く北の方に移り行けり云々。  
 (二) 石狩近文に住せるアイヌの酋長曰く、古昔欸冬一葉の下に十餘人を容るゝに足る短小の人種こゝに住めり、その遺跡處々に多し、この人種は日中勞働をなさず、只夜中においてなすのみ、會て不正なるアイヌ一婦人を窓内に引入れしに手に跡あり、我等今日の跡は彼等に習ひしなり、われ等の虚遇せしにより今去つて行く所を知らず云々。

猶アイヌ婦人の跡はコロボクウングルに學びしものなりとは、アイヌの一般に傳ふる處なり、すべて此等の口碑は敢て虚妄を傳ふるにあらず、彼等アイヌの祖先が目前に實歴せし事柄を、語り継ぎ言繼ぎ來れる處のものにて、充分に参考とするの價値あるものなり、さればその言に従ひ、當時の遺跡と稱せらるゝ處を掘試むるに、往々

石器、土製の椀等の遺物を出す事ありといふ。(八木獎三郎氏著日手宮の碑が果してこの短小人種の遺跡なりや否やは疑問なれども、後志國は最も堅穴の多き處にして、殊に手宮附近においては屢石鎗雷斧等を發掘する事あり、然もアイヌは殆んど石器を用るざるものなるが故に、彼等の所謂コロボクウングルの北海道に住し居たる事は争ふべからず。

古史に見ゆる土蜘蛛は即ちこのコロボクウングルなりとの説をなすものあり、或はまた日本における總ての石器時代の人種と共にエスキモ一人種の一ならんと説くものあり、彼等はその性質頗る温順にして、愛すべき容貌を有し居たるものゝ如く無爲にして着且食へる葛天氏の民に類し、至つて單純無邪氣の生活をなしたるものなる事は殆んど推測するに難からずといふ、蓋し希臘の詩人ヘシオットが

人類棲息の初期を叙して「此時代の人民は無邪氣にして幸福多く、病苦老衰を感ずる事なく睡眠して死せり」と説けるの類か。要するにコロボクウングルの何ものなるかは、考古學上未だ之を確かむるに足るべきの根拠を有せずと雖も、かゝる趣味ある人類が、自からその手を下せるものなりと、アイヌの口碑に残れるものが、歴々として手宮の断崖に存し、吾人數千年の下に生れて、之と對するを得るは、頗る興味ある事實といはざるべからず。余は端なく北海の穴居人種を説けり、乞ふ更に筆を移して、この穴居人種と吾人との間の連契たるアイヌに就て少しく記す所あらしめよ。

(二十二) アイヌ

(上)

余はコロボクウングルの記事をなせるの後に於いて、アイヌの記事をなさざるの、現存せる亞細亞洲中唯一の太古人種に對し、頗る不忠實なるを感ず、余はアイヌの部落を訪ひ、生活の状態を目撃するの餘裕を有せざりしを非常の遺憾とすれども、猶室蘭に於いて、はた白老停車場に於て、多くのアイヌを瞥見するの機會を有したるが故に、又決してアイヌを説くの資格なしと信ぜざるなり。

アイヌは世界中に於いて只僅かに北海道にのみ住せる、他に比類なき一種の人種にして、世界の人類學者間において最も疑問多き人民の一なり、或ものは蒙古人種に屬せりといひ、或ものは印度日耳曼人種と系統を一にせりと稱し、或ものは亞細亞洲南端の人類中に祖先を有すと説く、所説紛々たりと雖も、要するに亞細亞洲中最も太古



に屬せる人民の、僅かに北海道に名残を留めたりといふもの眞に近きに似たり、吾人は斯の如き人類學上貴重の人種を我邦に有するを榮とし、今後大いに彼等を保護して、その生存のために謀るべきはまさに吾人相愛の道において、弱者擁護の道において、はた學術に對するの道において、吾人の執ざる可らざるの義務なりと信ず。我邦の石器使用者を以てアイヌなりと説けるものあり、即ち太古に於いて我邦に到る所に住し居たる石器時代の人民はアイヌに外ならずとなせるなり、斯る議論は随分有力なる學者によつて唱へられたる所なれども、此説は諸所の貝塚より出る人骨とアイヌの骨格との相違、器物上の差異、意匠上の差違、歴史上の差違、口碑上の差違等によりアイヌと石器時代の人民と全く別種なる事は既に争ふべからざるの事實となれるが如し。

思ふに石器時代の人民を本邦より驅除したるは、その優等人種たりしアイヌにして、彼等はアイヌに追はれ、僅かに北海道に免れて、その餘喘を保ち居たるに、アイヌまたこゝに移り來りてその跋扈を逞うせるより、遂に僻遠の地に免れ、優勝劣敗の結果として、漸次消滅するに至りたるものにして、恰かも本邦に瀰蔓し居たるのアイヌが、三千年の以前において、徐々天孫人種と稱する吾人のために驅除せられ、彼等が嘗てその先人に與へたるの轍を蹈みて、また北海道に免れ、維新以降吾人のますく北海道に入るに及んで、更に次第に僻遠の地に去り、やがては全く彼等人種の跡を絶んとする今日の有様に彷彿たり、吾人アイヌに對して豈千古の感に堪へざるを得んや。

今日現存せる野蠻の人種にして悍惡猛烈ならざるもの殆んど鮮し、

獨り北海道のアイヌに至つては全く然らず、彼等は眞に無爲にして治まる太古の民の好摸型にして、性質極めて單純、その温良なる事小兒の如く、嘗て同族間に血を見たる事なく、最も正直にして品行を貴とみ、親子夫妻兄弟の間、慈愛孝悌これ主とし、その部落には必ず會長あり、君臣上下の別嚴然として敢て犯すものなく、長幼また必らず序あり、座するに食するに必らず順ありて、決して亂す事なし、嘗て名利を貪ぼるの念なく、また機訥にして絶えて虚言を吐く事なし、アイヌ間に傳はる口碑の信を置くに足るも、また實にその虚言を吐かざるの民たるにあり、歴史の教ゆる所によるに、結繩の政をなせるの時實に斯の如き民ありき、吾人幾千年の下に生れ詐僞、陷穽、陰謀、破倫、爭奪、殺戮等あらゆる罪惡の潮流滔々たるの現世において、猶且かゝる堯舜の民を見るは、恐らく何人と雖

も意外とせざる能はざる所ならん。

(下)

アイヌは事實において全く無爲の民なり、稼穡の法を知らず、牧畜の業を辨へず、また栽培の術を解せず、通貨なく、醫藥なく、文字なく、曆日なく、只風雨寒暑に暴露し、山に獵し水に漁し、極めて單純なる一生を醉生夢死の間に終るのみ。

アイヌは多毛の人種にして、かくの如きは人類中稀に見る處に屬すといふ、男子は長く髪を被ひり鬚髯々々として美はしく、兩眉は接續して殆んど一直線となり、目深く落ち、眼窩は鶯色をなし、一點の腫子黒き事漆の如く、顔は圓くして顴骨高く、額を剃りて、耳に銀環を貫く、その出るや弓矢を携へ槍を持ち脊に長銃を負ひ、腰に小刀を佩く、宛然としてこれ神代の人の面影にあらずや、女子もま

た髪を被むり、その靚装するや、白布もて抹額をなし、シドキと稱する鏡の如きものを胸にかけ、鏡邊に彩條を穿ち、貫くに青玉、金銀、玉環等を以てす、これもまた太古の風俗の僅かにアイヌ婦女間に存するものにあらずとせんや。

女子の日常務むる所は薪を取り、アツシを織るにあり、また夫に従ひ、出て、漁獵に従事するあり、最も情に厚く、且品行を慎しむ、平生その肌膚を露はすを恥ぢ、嬰兒に哺乳せしむるの時と雖も猶蔽ふに布を以てすといふ。

アイヌはその性純樸なるも、奸黠なる内地人に接觸せるがために、罪惡を覺え、時に刑罰に觸るゝものを出す事あり、然るに彼等一たび處刑を受け髪を薙れ、髻を剃られ、その固有の風俗を變せらるゝや、彼等深く自ら恥ぢ、遁逃して山間に隠れて出ず、彼等の社會も

また之を撥斥して伍せしめず、されば會々アイヌの罪を犯して入監するものある時、制規に従ひ、その亂麻の如きの蓬髪、胸を蔽ふの長髯を去去らんとするに際せば、匍匐膝行、號泣悲鳴して哀を乞ふの様、眞に感むべきものありといふ、その蒙昧にして廉恥に富む事猶斯の如きを見て、誰かその可憐の情に堪へんや。

アイヌの最も嗜むものは酒と煙草となり、酒は多く自ら釀し、煙草は普通内地品を用ゆ、彼等常に水獺、狐、鹿、貂、熊等の皮及熊膽等を持來りて、その最も嗜める酒と煙草とに交換せんとす、内地人往々彼等の愚味なるを奇貨とし、種々の猾策を弄し、極めて粗惡の品を瞞着して交換するか或は酒を吞ましめてその酔に乗じ横奪し去るものさへありといふ、先年 陛下より教育資金をアイヌに下賜されたる事ありて、當時札幌縣よりアイヌに與へたる諭告を見るに「古

へより舊土人(アイヌ)は甲子を知らず、雪を見て冬なるを知り、花を見て春なるを覺り、鯡の去るを以て夏とし、鮭の來るを以て秋となし、居るに定所なく、出るに方向なし、此時に當つてや漁場受負人なるものあり、慘酷にも舊土人を使役せる事牛馬狗豚の如く、間々その漁獵し得たる所のものを以て彼等と交易するも、數枚の熊皮は一包の煙草に値せず、數葉の鴉羽は一本の針を得るに過ぎず、十束の秋味も數升の酒に當らざるなり、その愚味視せられ、慘酷に使役さるゝ眞に慨嘆すべきものあり云々』また以て内地人が如何にその可憐にして樸訥なる太古の民を遇せしかを察するに足るべし、弱者の弱きに附入るは慘酷なり、更に弱者の正直を利するに至つては其奸黠卑劣苟も人類の風上に置べきものにあらず、蓋し日本人は弱者に對して慘虐なるの民なり、アイヌに對して然りしのみならず、近

く朝鮮人に對しても然りしにあらずや、余は朝鮮の一部を漫遊し來りて殊に適切にそを感ぜるなり。  
アイヌは内地人の迫害と蠶食とに堪へずして、維新以降大いにその數を減じ、明治二十七年の調査によるに北海道にあるのアイヌ僅かに一萬六千餘に過ぎず、只自然に放任し去る時はアイヌの滅絶蓋し遠きにあらざるべきも、幸ひに北海道土人保護法の制定あり、彼等を教育したは彼等の生存を維持せしむるがために、如今大いに意を用ゐつゝあるは、せめてもの心遣りと云ふべし。

余は手宮の碑に對して平野君等と考古談をなせる後、小樽公園を見魁陽樓に午餐を認め、食後同地の高橋直治君と會談し、午後四時函館にて別れたる交通丸の、既に投錨し居れるに投ずれば、船は間も